

山 王 前

—新潟県柏崎市・山王前遺跡発掘調査報告書—

1998

柏崎市教育委員会

山王前

—新潟県柏崎市・山王前遺跡発掘調査報告書—

1998

柏崎市教育委員会

序

柏崎平野を流れる鯖石川は、上・中流域で黒姫山北麓の丘陵を開析し、河岸段丘を形成しています。大小さまざまな河岸段丘は、米作りの技術を覚えた人々によって次第に開墾され、現在でも田園風景に富んだ稻作地帯となっています。平安時代には、この地域は佐橋莊さはしじょうと呼ばれ、いくつもの集落が形成されて、米作りが盛んに行われていたと考えられています。

平安時代というと、京の都における貴族たちの華やかな生活が連想されます。しかし、都から遠く離れたこの地域で、田畠を開墾し、作物を収穫していた人々は、どのような暮らしを送っていたのでしょうか。たいへん興味のあるところです。

鯖石川中流域の市内大字宮平地内では、県営農免農道整備事業が行われています。本報告書は、それに先立って実施した山王前遺跡発掘調査の記録です。この地域の周辺では、近年の開発事業に伴って、さまざまな遺跡が発見され、調査されています。それらは、縄文時代から中世、あるいは近世にまでいたる本地域の長い歴史を示すとともに、当時の人々の暮らしを知るための貴重な手がかりとなっているのです。

調査期間中には、大雨によって幾度も調査区水没などの被害に見舞われましたが、無事に調査を終了することができました。調査面積はとても小さく、遺跡のほんの一部分を発掘したにすぎません。しかし、その中で当時の遺構や多くの遺物などが発見されたことは、私たちの祖先の歴史を知る上で、貴重な事実を教えてくれました。ささやかではありますが、調査の成果を報告する本書が、地域の歴史を理解する一助となり、遺跡保護のために活用されれば、この上なく幸いです。

このように調査を無事に終了できましたことは、事業主体でもあります新潟県柏崎農地事務所、ならびに施行責任者となられた株式会社石塚組のご理解とご協力の賜物であります。また、宮平区長や宝泉寺住職など、宮平集落の皆様からも、多大なご理解とご協力を賜りました。時には雷雨に見舞われる中、最後まで調査に参加されました柏崎市シルバー人材センター会員の皆様および調査員各位、そして本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成10年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字宮平1193番地ほかに所在する山王前遺跡の発掘調査の記録である。
2. 本事業は、新潟県営農免農道整備事業く石曾根地区に伴い新潟県柏崎農地事務所から柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が事業主体となって発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査は、平成9年10月7日から同年11月6日まで現場作業を実施し、その後平成10年3月31日まで整理作業及び報告書作成作業を行った。現場作業は、柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けて実施し、整理・報告書作成作業は、柏崎市西本町三丁目喬柏園内文化振興課遺跡調査室において行った。また、現場作業は文化振興課職員を調査員、遺跡調査室のスタッフを調査補助員とし、整理・報告書作成作業は、職員（学芸員）を中心に、遺跡調査室のスタッフで行った。
4. 発掘調査によって出土した遺物は、注記に際して遺跡名を「山王」と略し、グリッド名や遺構名及び層序等を併記した。
5. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（文化振興課遺跡調査室）が保管・管理している。
6. 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、編集は平吹が担当した。

第I章、第II章第1節、第III章第1～3節第1項、図面図版……………中野　純
第II章第2節、第III章第3節第2項、第IV章、第V章、図面図版、写真図版……………平吹　靖
写真図版……………品田高志
7. 本書掲載の図面類の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
8. 発掘調査から本書作成まで、事業主体である新潟県柏崎農地事務所並びに工事施行責任者の株式会社石塚組から、数多くのご理解とご協力を賜った。また、下記の方々からも、多大なご教示・ご協力及びご指導を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。
(五十音順、敬称略)
伊藤啓雄・田辺晋三・田辺喜雄・帆刈敏子・三井田忠明・村山幸子・渡邊三四一・柏崎市ガス水道局

調　　査　　体　　制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一

総　括 小林清福（文化振興課長）

管　理 石塚純一（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長事務取扱）

調査指導 品田高志（文化振興課埋蔵文化財係主査学芸員）

調査担当 中野　純（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

調　　査　　員 平吹　靖（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

渡辺富夫（文化振興課埋蔵文化財係嘱託員）

徳岡香代子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託員）

調査補助員 大野博子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

黒崎和子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

整理補助員 片山和子・竹井　一・萩野しげ子・吉浦啓子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

現場作業スタッフ

石塚久美・植木房吉・大橋　勇・大矢　昇・木村勝治・小林辰雄・中沢時春・布施達栄・

日崎　忠・矢代清英（柏崎市シルバー人材センター会員）

目 次

I 序 説	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 発掘調査の経過.....	2
II 遺跡の位置と環境.....	3
1 遺跡の位置と地理的環境.....	3
2 山王前遺跡をめぐる歴史的環境.....	5
1) 鮎石川中流域の古代～近世遺跡	
2) 遺跡の立地と概観	
III 遺跡と遺構	8
1 調査の方法とグリッドの設定.....	8
2 基本層序.....	8
3 検出遺構.....	10
1) 第Ⅲ層・第Ⅳ層（中世・近世）	
2) 第Ⅴ層（古代）	
IV 出土遺物	16
1 古代の遺物.....	16
1) 土器類	
2) 金属製品	
3) 自然遺物	
2 中・近世の遺物.....	20
3 その他の遺物.....	21

V 総 括	24
1 調査の要約	24
2 遺跡の消長	24
3 集落における土地利用	25
引用・参考文献	26
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 柏崎平野の地形分類と山王前遺跡の位置	4
第2図 鮎石地区における古代～近世の遺跡	6
第3図 山王前遺跡ピット類深度分布図	13
第4図 山王前遺跡ピット類底面標高分布図	13
第5図 山王前遺跡ピット類法量分布図	14
第6図 山王前遺跡土師器（無台椀）底径別個体数分布図	16
第7図 山王前遺跡土師器（無台椀）法量分布図	18

表 目 次

第1表 山王前遺跡遺構計測表	15
第2表 山王前遺跡出土遺物観察表（1）	22
第3表 山王前遺跡出土遺物観察表（2）	23

図版目次

図面

- 図版1 山王前遺跡と宮平遺跡群
- 図版2 山王前遺跡発掘調査区とグリッドの配置
- 図版3 山王前遺跡遺構全体図（第III・IV層）
- 図版4 山王前遺跡遺構全体図（第V層）
- 図版5 山王前遺跡遺構個別図（SD-51）
- 図版6 山王前遺跡出土遺物1
- 図版7 山王前遺跡出土遺物2
- 図版8 山王前遺跡出土遺物3

写真

- 図版9 遺跡1 宮平地区周辺の航空写真（1961年撮影）
- 図版10 遺跡2 a. 遺跡遠景（石川岬から西方を望む）
b. 遺跡遠景（石川岬から西方を望む）
- 図版11 発掘調査1 a. 表土剥ぎ b. 調査区壁の整形と木根処理
c. 木根処理（1） d. 木根処理（2）
e. 遺構確認（ジョレン掛け） f. サブトレンチと遺構の発掘
g. 第IV層の発掘（1） h. 第IV層の発掘（2）
- 図版12 発掘調査2 a. 測量 b. SD-51溝上層の発掘
c. SD-51溝の発掘 d. 調査区水没状況
e. 発掘調査スタッフ
- 図版13 基本層序 a. 調査区東壁土層断面全景（南から）
b. 調査区東壁（中央）（東から）
c. 調査区東壁（南部）（東から）
- 図版14 第IV層の調査1 a. 第IV層遺構群全景（1）（東から）
b. 第IV層遺構群全景（2）（北東から）
- 図版15 第IV層の調査2 a. 第IV層遺構群全景（3）（北から）
b. 第IV層遺構群全景（4）（南西から）

- 図版16 第Ⅳ層の調査3 a. Skp-12ピット b. Skp-19ピット
c. Skp-19・20ピット d. Skp-29ピット
e. Skp-16・17ピット(1) f. Skp-16・17ピット(2)
g. Skp-27ピット h. Skp-27・28ピット
- 図版17 第Ⅳ層の調査4 a. Skp-25・26ピット(1) b. Skp-25・26ピット(2)
c. Skp-28ピット d. Skp-38・39ピット(1)
e. Skp-38・39ピット(2) f. Skp-21ピット
g. SD-51溝出土土師器(1) h. SD-51溝出土土師器(2)
- 図版18 第Ⅴ層の調査1 a. 第Ⅴ層完掘状況(1) (南南西から)
b. 第Ⅴ層完掘状況(2) (南西から)
- 図版19 第Ⅴ層の調査2 a. 第Ⅴ層完掘状況(3) (東から)
b. 第Ⅴ層完掘状況(4) (北北東から)
- 図版20 第Ⅴ層の調査3 a. 第Ⅴ層遺物出土状況(1) (北東から)
b. 第Ⅴ層遺物出土状況(2) (東から)
- 図版21 第Ⅴ層の調査4 a. 第Ⅴ層遺物出土状況(3) (南西から)
b. 第Ⅴ層遺物出土状況(4) (南から)
- 図版22 第Ⅴ層の調査5 a. SD-51溝と基本層序 (北東から)
b. SD-51溝層序と覆土 (南東から)
- 図版23 第Ⅴ層の調査6 a. SD-51溝遺物出土状況(1) (南東から)
b. SD-51溝遺物出土状況(2) (南東から)
- 図版24 第Ⅴ層の調査7 a. SD-51溝遺物出土状況(3) (北から)
b. SD-51溝遺物出土状況(4) (南から)
- 図版25 第Ⅴ層の調査8 a. SD-51溝完掘(1) (南東から)
b. SD-51溝完掘(2) (北から)
- 図版26 出土遺物1 a. 古代の遺物(1) b. 古代の遺物(2)
- 図版27 出土遺物2 a. 古代の遺物(3) b. 古代の遺物(4)
c. 土師器底面拡大写真
- 図版28 出土遺物3 a. 古代の遺物(5) b. 古代の遺物(6)
- 図版29 出土遺物4 土師器橢器面拡大写真
- 図版30 出土遺物5 a. 中・近世の遺物(1) b. 中・近世の遺物(2)
- 図版31 出土遺物6 a. SD-51溝出土植物遺存体 b. 木杭

I 序 説

1 調査に至る経緯

山王前遺跡は、柏崎市大字宮平1193番地ほかに所在する遺跡である。鰐石川中流域の左岸に形成された沖積段丘上に立地し、現況の大半は集落（宅地）となっている。鰐石川は下流域で蛇行し、広い沖積地を発達させるが、上・中流域では黒姫山北麓の丘陵に河岸段丘を形成する。この河岸段丘を開析する沢も多く、山王前遺跡の立地する段丘も沢の浸蝕によって半島状となり、東へ向かって突出している。周辺の河岸段丘は沖積面を含めて、標高約25m前後の段丘面、標高約30m前後の段丘面、標高約38m前後の段丘面があり、山王前遺跡の立地する段丘面は標高約34m前後となっている。標高約38m前後の段丘面は沢の浸蝕が稀薄で、島状に取り残されたものであり、山王前遺跡の立地する段丘面が沖積面では最も標高が高い。これらの河岸段丘を開析する沢頭の標高は100mを越え、山王前遺跡の立地面も西側から延びる標高160m以上の丘陵に接している。

当該地周辺における遺跡の存在は古くから知られており、昭和48年には凹石や須恵器等が発見され、秋里遺跡が周知化されている。また、昭和58年には宮平の塚が確認されるとともに、宮平城跡も周知化されるに至っている。しかし、山王前遺跡は現況が集落地となっていることもあり、その存在は近年まで知られていなかった。その発見の経緯は、当該地に計画された県営農免農道整備事業＜石曾根地区＞を端緒とする。平成6年8月25日付け柏農地第1145号により、新潟県柏崎農地事務所から当該地の踏査依頼が提出されたことを受け、平成7年4月6日に柏崎市教育委員会が当該農免農道全線の現地踏査を行った。その結果、大字石曾根の深澤遺跡等が新たに周知化されたが、山王前地区については現況が集落地部分となっており、地表面の詳細な観察を行うことができなかった。しかし、周辺における遺跡分布の状況や地形的な観点等からは、未周知の遺跡が存在する可能性が高いと判断され、用地買収後に改めて試掘調査等を実施する必要のあることが平成7年4月18日付け教社第38号で伝えられた。

試掘調査は、平成7年10月13日付け柏農地第2180号による新潟県柏崎農地事務所の調査依頼を受け、日程調整等の調査実施に向けた諸準備を行った。平成8年5月1日には開発区域内における土地所有者の免掘承諾書が提出され、市教委は平成8年5月2日付け教社第101号で文化財保護法第98条の2第1項の通知を提出、平成8年5月8日～10日に試掘調査を実施した。その結果、当該開発区域内の一部において、古代を主体とする遺物包含層が確認され、山王前遺跡が周知化された。

これを受けて、平成8年7月26日付け柏農地第1480号で文化財保護法第57条の3第1項の通知が提出され、平成8年8月21日付け教文第779号により、新潟県教育委員会から工事着手前に発掘調査を実施するよう通知を受けた。その後、当該地の農免農道の法線に若干の変更があり、本発掘調査対象面積が減少するが、平成9年10月頃から本発掘調査を実施することで、事業主体者との協議が成立した。平成9年9月22日付け土地所有者の発掘承諾書が提出され、平成9年10月1日付け教文第39号で文化財保護法第98条の2第1項の報告を提出した。そして、調査着手を平成9年10月7日に設定し、諸準備を行った。また、集落地内での調査であったため、事業主体者等を通して周辺住民への説明を行い、調査を開始した。

2 発掘調査の経過

平成9年10月7日、好天にも恵まれて発掘調査に着手した。本発掘調査対象区が宝泉寺の境内であり、1m以上の盛土が行われていたため、まず重機による表土剥ぎから着手することとし、並行して休憩施設の設置や機材の搬入等を行った。翌8日は一転して暴風雨となり、これらの作業が難航したが、9日には終了することができ、現場付近への標高杭設置等も行った。週明けの10月13日は前日からの雨が降り続いていたが、発掘作業員を導入し、本格的な発掘作業を開始した。現場には柏崎市シルバー人材センターの会員9名と事務局員2名、市教委の調査員等3名や埋蔵文化財係長が勢揃いし、文化振興課長の挨拶を手始めに、調査にあたっての注意事項等の諸連絡を行い、この後直ちに発掘作業に着手した。

初日の作業は、表土剥ぎ後の包含層掘削や木根処理等を中心にして、廃土置場の設置等も行った。14日もこれらの作業を中心に行なったが、サブ・レンチを2カ所設定して包含層の堆積状況の確認をした。その結果、第IV層の中世～近世を主体とする遺構確認面と、第V層の古代を中心とする遺物包含層の2面が存在することが把握された。17日には木根処理等が終了したため、遺構の確認作業を行い、ピットを中心とする遺構群が確認された。20日から遺構の半截作業を実施し、土層観察等を行って遺構台帳を作成した。そして、遺構の完掘と並行してグリッド坑を設置し、22日に第IV層遺構群の写真撮影や平面図作成を行い、第V層遺構確認面の調査を終了した。

調査区南半では第IV層の遺構が確認されなかったため、10月20日より遺構発掘と並行して、第IV層の掘削と第V層遺物包含層の発掘を行っていた。23日には第V層南半における遺物出土状況の写真撮影と平面図作成を行い、遺物の取り上げを実施した。また、北半についても第IV層を掘削し、第V層の発掘を逐次行なっていった。24日には調査区南半の基本層序の断面図を作成するとともに、第V層北半において調査区に直行する流路跡（SD-51）を検出した。しかし、翌25日以降は荒天となり、調査を再開できた28日には調査区が浸水するとともに、調査壁が崩落していた。この日は調査区の復旧作業に専念したが、午前中から再び雨天となり、その日の作業を断念した。29日には復旧作業も終了し、第V層北半のSD-51脇から木枕列も検出された。30日からはSD-51に2カ所のベルトを設定し、発掘作業を行った。SD-51の確認面からの深度は概して浅いものであったが、既に現表土面から2m程度掘削した深度から検出されており、湧水に悩まされながらの作業であった。また、この頃から毎夜のような降雨に見舞われ、翌日には調査区が浸水し、調査壁が崩落するといった状況が続いている。雨水の排水と崩落土の撤出が日課のようになり、文字通り泥まみれの状態での作業が続いた。そのため、作業の進捗に大幅な遅れが生じることとなってしまった。しかし、SD-51から完形の土師器が出土する等の成果があったのもこの頃で、調査運営上の志気が失われるには至らなかった。

11月に至っても荒天が続き、調査を再開できたのは4日になってからであった。この日には第V層北半とSD-51の発掘が終了し、写真撮影の後平面図を作成することができた。翌日も雨天となり、作業を中止したが、6日には第V層北半とSD-51の遺物を取り上げ、完掘作業を行った。これにより、調査区内の発掘作業が終了したため、写真撮影と平面図の作成を実施した。同時に、機材の整理や撤収等の作業も行った。そして、これらの作業終了後、市教委の文化振興課埋蔵文化財係長の挨拶により、発掘作業員の解散式が行われ、表土剥ぎ延べ3日間、発掘作業延べ14日間の計17日間で、今回の発掘調査現場作業がすべて終了した。発掘作業員の延べ人数は105人であった。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

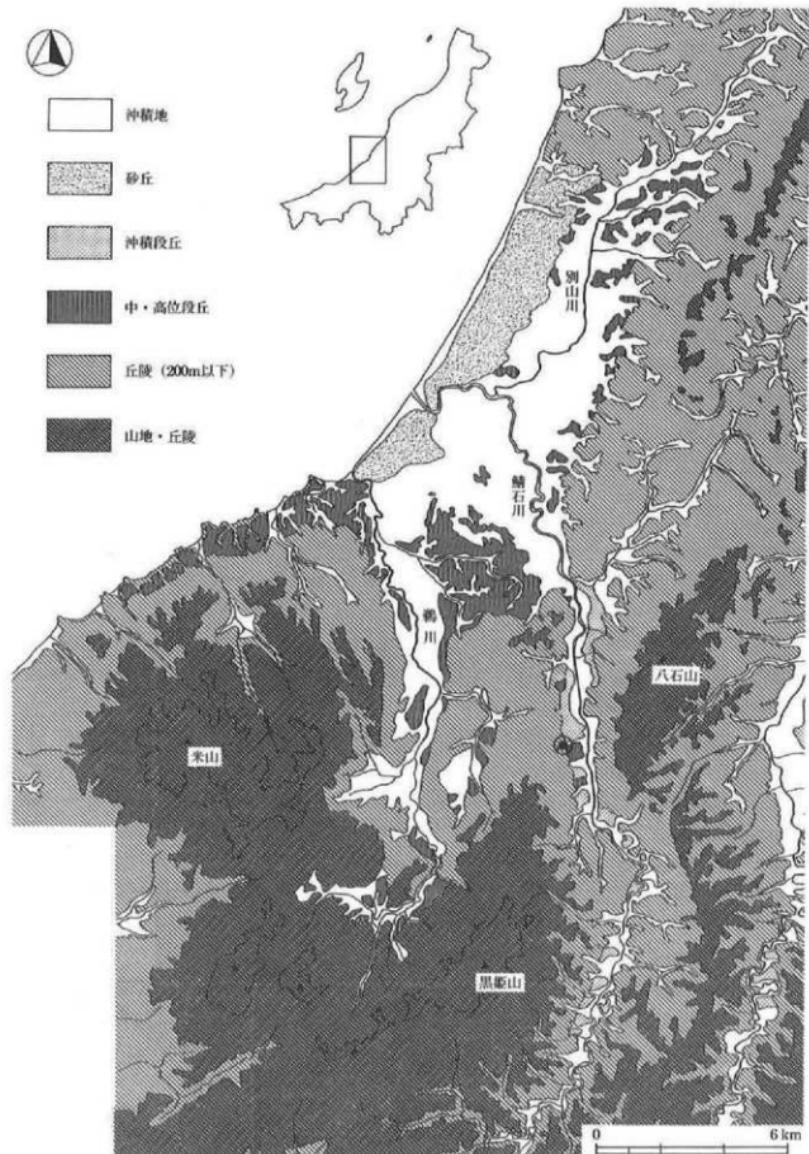
柏崎平野概観 柏崎市は、新潟県のはば中央に位置する人口9万人ほどの小都市であり、行政的な地域区分では中越地方に属している。新潟県は上・中・下越及び佐渡地方に区分されており、北側に位置する下越は、信濃川と阿賀野川の二大河川に形成された広大な新潟平野を有し、南側に位置する上越地方は、南方に北アルプスを控えている。その間に位置する中越は、魚沼山地を主体とする南部と信濃川中流域から柏崎平野を含む北部とに大きく区別され、さらに柏崎平野は、北部でも西半部に位置している。

柏崎平野は、鶴川と鰐石川を主要河川として形成された一つの独立した臨海沖積平野である。この二大河川は個々に大小の支流をもつ独立した水系を有し、柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊は、南方から連なる東頸城丘陵の一部であり、この丘陵地形は北流する鶴川・鰐石川によって米山・黒姫山・八石山の刈羽三山をそれぞれの頂点として西部・中央部・東部に三区分される。西部は米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、その広がりは、低位・中位・高位と各段丘の形成が顕著な海岸まで続く。米山は現在でも隆起を継続しているといわれており、際立って傾斜の強い地形的景観となっている。平野部をなす冲積地は、砂丘後背地として湿地性がつよく、鶴川・鰐石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。中央部は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、冲積地に接する一帯には冲積地を形成している。また、その北側には冲積地が広がっている。東部は、北東方向の背斜軸に沿って西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って、別山川・長島川といった鰐石川の支流が南東に流れる。冲積平野部の北西面は海岸線に沿って柏崎砂丘・荒浜砂丘が伸びており、荒浜砂丘は砂層の堆積を増しながら北上し、北側丘陵部に接している。

今回調査された山王前遺跡は、地形区分でいえば柏崎平野の東部に位置し、柏崎平野を形成する二大河川の一つ鰐石川中流域左岸の僅かな面積の冲積地内に立地している。

鰐石川中流域と山王前遺跡 当該地は四方を緩やかな丘陵に囲まれ、鰐石川が形成した冲積段丘直下の、舌状に伸びる僅かな冲積地の際に立地する。山王前遺跡が立地する鰐石川中流域の冲積地は、河川の左岸側であるが、現鰐石川までは直線で約700mの距離である。鰐石川中流域の冲積地の標高はおおむね20~30mであり、当該地の標高は冲積段丘に近く約35mとなっている。当該地の西南方向には、標高100m前後の丘陵地帯が徐々に迫り上がって黒姫山まで続いている。ほぼ真東には八石山頂上を間近に控え、南方には黒姫山を頂点とした緩やかな丘陵を臨む景観の中にある。

鰐石川の上・下流域は非常に蛇行が激しく、特に広い冲積地を横切る下流域では、近年まで度重なる水害をもたらしていた。一方、当該地の立地する中流域は蛇行が非常に緩やかで、長期間水量を変化させながら冲積地を形成し、現在のような河道域を保ち続けている。比較的広域な冲積地を抱える鶴川中流域とは異なり、鰐石川中流域の冲積地は、鰐石川を挟んで両岸に約400m幅程度に形成されている。鰐石川中流域の右岸は、200mを超える八石山系丘陵が鰐石川に平行して続いている。そして、北部の鰐石川支流である長島川流域を除くと冲積地が深く丘陵部に入り込む箇所がなく、大規模集落の立地を妨げている。しかし、南条・飛岡地区は冲積地と冲積段丘を合わせて規模な水田地帯を開墾している。左岸は、右岸と



第1図 柏崎平野の地形分類と山王前遺跡の位置

は異なり200mを超えるような丘陵部は少ないが、同様に沖積地の面積も小さい。与板地区は沖積地・沖積段丘上に中規模な水田が開かれており、西側の緩斜面を利用して果樹園も営まれている。加納・宮平地区の沖積段丘上には田畠が存在し、舌状に入り込んだ沖積地上に小規模な集落を形成している。

山王前遺跡が立地する段丘直下の細長い沖積地には、鯖石川付近の水田に向かう沢跡を利用した用水路が流れ、現在両岸の僅かな沖積地で耕作が営まれている。鯖石川中流域の土地利用状況は、河川流域を水田に利用し、沖積地の奥地や段丘面直下に若干の整地を行ない畑と集落を形成しており、河川流域の僅かな沖積地をも有効に活用している。鯖石川中流域には、丘陵部奥に入り込む舌状の沖積地が多数存在するが、そのどれもが同様の土地利用がなされており、限られた肥沃な沖積地を、余すことなく有効活用している。また、鯖石川中流域から上流域にかけて存在する沖積段丘は、それぞれに発達した高低差をもち、この地域は現在でも傾斜部の地滑りが絶えない地域である。当該地周辺も、段丘の傾斜部が地滑り地区に指定されており、度重なる地滑り痕がみられる。また、西南に位置する丘陵部には、昔から繩文土器が表採される散布地として認識されている。

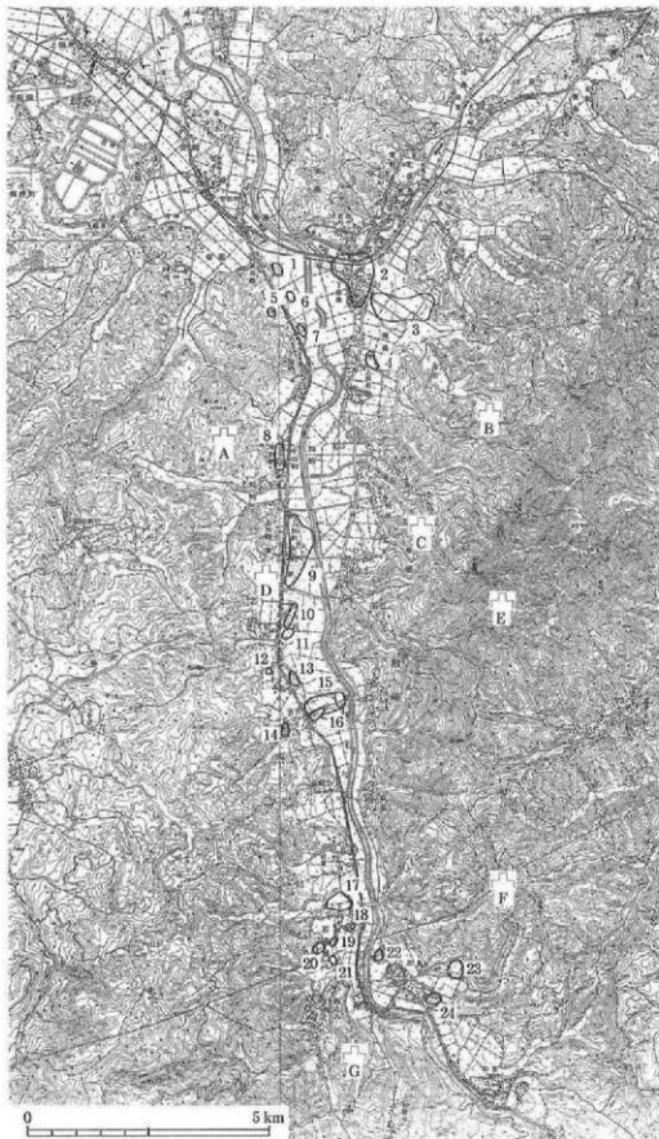
山王前遺跡の立地は、昨年度の試掘調査の結果、現在の宮平集落の西南部に位置するものであることが確認された。今回の調査区は、集落西南端にある宝泉寺の境内先端部分であった。宝泉寺は、段丘の裾部分を主に盛土工法で整地して建立されており、自然地形を利用して建てられた、宮平集落を構成する他の民家とは一線を画している。

2 山王前遺跡をめぐる歴史的環境

1) 鯖石川中流域の古代～近世遺跡

古代 鯖石川中流域の古代の遺跡は、現在10遺跡が確認されており、市内では決して多い地域ではない。宮平地区においては、赤城遺跡・秋里遺跡・谷内田遺跡・山王前遺跡の4遺跡が確認されている〔柏崎市教委1997〕。詳細な遺跡の内容や年代が確認できるような情報は得られていないが、赤城遺跡では土師器が、谷内田遺跡では須恵器甕が採集され、秋里遺跡では土師器・須恵器が表採されている。山王前遺跡の確認調査では10世紀終末から11世紀初頭に比定される古代の土師器が出土している。南条地区では馬場・天神腰遺跡と亀ノ倉遺跡が、加納地区では上加納遺跡、田島地区では久保田田島神社遺跡が確認されている。また、平成9年度の石曾根地区における試掘調査で、新たに宮田遺跡・中村遺跡が発見されている。これらの遺跡の立地は、概して鯖石川沿いの沖積地縁辺部や沖積段丘上に形成されている。鯖石川中流域に確認されている古代の遺跡分布を全体的に見ると、鯖石川右岸には3遺跡、左岸には4遺跡存在するが、中世以降になると、左岸の方が圧倒的に遺跡数が多くなることが確認されている。右岸には大規模な集落遺跡と思われる馬場・天神腰遺跡と亀ノ倉遺跡が、南条の沖積段丘上に立地しているが、中鮪石地区には現在のところ確認されていない。一方、左岸には谷内田遺跡・赤城遺跡・山王前遺跡がやや集中した形で存在する。

宮平地区では、山王前遺跡の東北東約500mの距離に前述の秋里遺跡が存在する。秋里遺跡では、おおよそ9世紀頃の須恵器甕・壺の破片が表採され、山王前遺跡では、平成8年度試掘調査の段階で土師器甕が圧倒的に多く出土しており、須恵器が全く出土しなかった。平成8年度に実施された秋里遺跡の確認・本発掘調査では、大規模な掘削を伴う圃場整備後であったため、古代の包含層が既に失われていることが確認された〔柏崎市教委1997〕。越後の消費遺跡で須恵器が確認されなくなるのは、10世紀終末から11世



〈古代～近世の遺跡〉

- 1 下川原遺跡 (9・13・14C)
- 2 馬場・天神瓢遺跡 (12～15C)
- 3 亀ノ倉遺跡 (平安・12C)
- 4 南条遺跡 (中世)
- 5 下加納遺跡 (13C)
- 6 山谷遺跡 (中世)
- 7 住吉遺跡 (中世)
- 8 山王おばたけ遺跡 (中世)
- 9 上加納遺跡 (平安・中世)
- 10 鴨田遺跡 (15C)
- 11 欠畠遺跡 (15C)
- 12 谷内田遺跡 (平安・中世)
- 13 赤木遺跡 (平安)
- 14 山王前遺跡 (平安・中・近世)
- 15 秋里遺跡 (讃岐・弥生・中世)
- 16 宮平城跡 (中世)
- 17 深澤遺跡 (14C)
- 18 爪竹遺跡 (15C)
- 19 片畑遺跡 (中世)
- 20 中村遺跡 (讃岐・古代)
- 21 宮田遺跡 (古代)
- 22 山室瀧谷遺跡 (中世)
- 23 八木村遺跡 (16C)
- 24 久保田田島神社遺跡 (平安)

〈山城〉

- A 加納城跡 (室町)
- B 南条城 (南北朝)
- C 霧根冬城 (室町)
- D 今板城 (室町～織田)
- E 八石城
- F 田島城
- G 石曾根城

第2図 鯖石地区における古代～近世の遺跡

紀初頃のことであり〔春日1992〕、山王前遺跡はこの時期に相当すると考えられている。のことから両遺跡は立地に時期的な相違があるものと思われる。

中・近世 山王前遺跡における試掘調査の結果から、遺跡の時期的中心は古代にあると考えられており、今回の調査でも、ほぼ同様の結果が得られている。このため、中世以降の遺跡については簡単に触れる程度としたい。鯖石川中流域では中世以降の遺跡が、時期的に古代の遺跡と重複するものも含め17遺跡存在する。古代の時期に比べ遺跡数が2倍近くまで増加する。中世になると当地域に山城が点在するようになり、それと併行して小規模な集落も形成されている。

近世の遺跡は、この時期に定住化が進むため現在の集落とほぼ一致するものと思われ、開発等で調査の対象となる機会を得ることも少ないため、その存在はよく知られていない。しかし、現在の集落内に立地する山王前遺跡では、試掘調査で近世の遺物が出土しており、近世から現在まで当該地の集落位置が大きく変容することなく、今まで宮平集落が存続してきたことを証明している。

2) 遺跡の立地と概観

山王前遺跡周辺の現況は大規模な農道開発が間近に迫っており、調査区両側は既に道路基盤整備がほぼ完了し、調査区部分のみが孤島のように取り残された状況であった。そのため、当該農道の竣工と開通は発掘調査終了を待つばかりの状況であった。今回の調査区は大字宮平地内、宝泉寺の境内先端部分であったが、境内は集落内の他の立地とは一線を画し、厚く盛土整地された部分であった。この宝泉寺の縁起は文献上15世紀中頃に通り、『白河風土記』〔柏崎市立図書館1977〕「宮平村」の項には、文安年間（1444～1449）に領主秋野玄蕃頭が菩提所としたが、応仁の乱より暫く無住になったとされている。また、『中鯖石村誌』〔柏崎郷土資料刊行会1979〕では、「寶泉寺」の創建年代を文安三（1446）年と記している。境内西側の裏山の一部は現状では切り開かれて墓地になっており、境内は以前存在した石塔類が用地買収後にはすっかり取り去られていた。石塔類に寺の創建年代まで遡るような古い年号が刻まれたものは確認できず、全てが近世後期以降のものであった。境内と道路との段差部には、整地後植林されたと思われる杉の切り株が残り、中にはかなりの樹齢をもつ大木も存在した。調査区南側にある道路を越えた部分には、幅約10m前後の沢跡が現存しており、現在では幅1.5mのコンクリート製側溝を埋設し農業用水路としている。当該地の地形は、舌状に伸びた沖積地の更に細長い部分であり、過去に大規模集落が形成されていたとは考えられず、現在のような規模の集落が比較的古くから維続されている。

鯖石川中流域で沖積地に立地する遺跡は、山王前遺跡を含めて14遺跡存在する。その内、5遺跡が古代の遺跡に該当する。当地域では遺跡が沖積地の奥地や、沖積段丘上に立地するのが特徴である。これは、前述したこの地域の古代からの集落形成や、土地利用法が起因しているものと考えられている。本遺跡も例外ではなく、古代の遺跡の中でも、沖積地の最も奥部の丘陵部直下に位置する。舌状に入込んだ僅かな冲積地に立地する遺跡は、本遺跡のみである。鶴川流域には、舌状の沖積地に立地する剣野水上遺跡が存在するが、未調査等の理由のためその実態は明確にされていない。当遺跡がこのような沖積地奥部に立地しているのは、現在も農業用水として利用されている沢跡を当時の集落形成に不可欠な水源として利用可能であった事が、最大の理由であると考えられる。

III 遺跡と遺構

1 調査の方法とグリッドの設定

本発掘調査の範囲については、試掘調査の結果に基づき遺物包含層が検出された地点を中心に設定した。今回の調査区に北接する地点では、試掘調査時に包含層が検出されなかったため、実際には宝泉寺境内に限定された地点に対して本発掘調査を実施した。また、試掘調査の直後は約200m²程度の面積を対象範囲としていたが、その後の農免農道法線変更に伴い、実際の発掘面積は約92.4m²となった。

試掘調査の結果では、調査対象区には1m以上の整地層が堆積し、これらの層位には遺物の包含が稀薄であった。そして、この整地層下には古代を主体とする遺物包含層が確認されていたため、当初より重機による遺物包含層直上までの掘削を計画した。遺物包含層は発掘作業員による手作業での掘削を予定し、遺構確認や遺構発掘作業等も行うこととした。また、遺物の取り上げや遺構平面図の作成等は、調査用に設定したグリッドを基準に行うこととし、逐次記録写真的撮影も実施した。

調査グリッドは、農免農道の工事用に設置されたEC 6杭及びNo.34杭を基準とし、10m四方の大グリッドを設定した。さらに、2m四方の小グリッドを設定し、第V層の遺物取り上げのために1m四方のグリッドも設定した。大グリッドは宝泉寺境内全域を包括するように、北一南ラインを北側からA・B・C…のアルファベットで、西一東ラインを西側から1・2・3…の算用数字で標記することとした。グリッド名は北西端の交点（杭）で示し、北一南ラインは真北から東へ約21度振れる方向となった。小グリッドは、大グリッドを2m毎に分割し、1~25までの算用数字で標記した。また、小グリッドをさらに1m毎に分割し、i~ivまでのローマ数字（小文字）で標記して、1mグリッドを設定した（図版2参照）。

2 基本層序

山王前遺跡の基本層序は、調査区西壁の土層観察により把握した（図版4）。基本層序は大きく第I層～第V層までの5つに分層される。河岸段丘を開拓する沢内に立地することから、従来は北東方向へ傾斜する地形であったが、4次にもわたる盛土によって整地されたことにより、現在ではほぼ平坦な地形を保ち、宝泉寺が建立されている。当該地はこのような造成地点の端部に相当し、最深部での盛土は現表土面から約2.1mもの厚さに達している。

第I層は現表土であり、暗褐色を呈する。小礫を多量に含む。第II a層は当該地を整地するための盛土で、暗黄色を呈する。暗褐色土と暗黄色粘質土の混合土である。このような盛土は4次にわたって行われており、本層はその第4次の整地層である。第II b層は第3次整地層で、褐色を呈し、暗褐色土と暗黄色粘質土の混合土である。第II c層は第2次整地層であるが、その堆積厚は概して薄く、暗黄色を呈する。暗褐色土と暗黄色粘質土の混合土であり、木炭及び焼土粒子を少量含む。

第III a層は中世～近世の遺物包含層である。旧表土に相当し、暗褐色を呈する。また、SK p-29等の遺構検出面でもある。木炭及び暗黄色粘質土を少量含む。第III b層は調査区の北半にのみ認められ、SD-4等の遺構確認面である。浅灰色を呈する沖積層で、調査区北半に小規模な流路のあったことを提示し

ている。第III c層も同様に、調査区北半にのみみられる沖積層である。淡灰色を呈する。第III d層も、調査区の北半にのみ堆積した沖積層である。黒色植物腐植土に相当し、沖積作用が比較的顕著に認められる。木葉等の植物遺存体を包含し、SD-51の周辺から検出された木杭等も、その位置や配列等から、本層を形成した流路との関連性が強いと考えられる。

第IV a層は第1次整地層に相当し、淡黄色を呈する。明黄色粘質土を基調に、暗褐色土が混合したものである。中世～近世の遺構確認面で、ピットを主体とする遺構群が検出された。また、中世～近世の遺物を包含し、SK-p-44が本層上面から掘り込まれていていること等から、第III層との時間的差異は顕著ではない。おそらく第IV層を盛土し、整地した後、中世～近世における一定期間の遺跡が営まれたのが第III層であり、旧表土としての土壤堆積が既に厚い要因と見做される。すなわち、第IV層造成の時期と第III層の堆積開始時期は、ほぼ同時期と思われる。これらのことから、本層の造成は、当該地のその後の土地利用の端緒と見做されるのである。第IV b層も同様に第1次整地層に相当し、浅灰黄色を呈する。第IV a層と第V層の漸移層である。第IV c層も第1次整地層であるが、調査区の北半にのみ認められる。SD-51の流路を規制するための盛土と思われる。色調は暗灰黄色を呈し、第IV a層と第III d層及び第V層の漸移層である。

第V層は河岸段丘を開析した沢内の堆積層で、黒色植物腐植粘質土である。古代の遺物包含層に相当し、検出状況は遺物廐棄場の様相を呈する。また、木葉等の植物遺存体も認められる。当該地の第1次整地後には遺構が形成されているが、古代においては遺構の存在は確認されず、遺跡の中心は河岸段丘の平坦部分にあったと考えられる。したがって、沢の傾斜を利用して、廐棄が行われていた可能性が高く、今回の調査区における第V層は、その廐棄場に相当すると考えられるのである。なお、SD-51は本層から第IV b層直下に至るまで認められ、第1次整地後も第III b～d層の流路内沖積層がみられる。さらに、第III a層直下からはSD-4も検出されており、この地点での湧水あるいは流路は、比較的長期間維続されていたことが示されている。

今回の調査区は、大略的には河岸段丘を開析した沢跡に相当し（第V層）、その沢幅の狭小化に伴って小規模な流路が形成されているのである（SD-51）。第IV a～c層は中世～近世の整地層であることから、中世以降には盛土の造成が行われ、沢跡が比較的平坦に整地されたと考えられる。そして、その後遺構群が形成され、中世～近世における一定期間の生活等が営まれたのが、旧表土として土壤化した第III a層であろう。この段階においても、ある程度の湧水による流路の痕跡が、流路内沖積層の存在により提示されている（第III b～d層）。そして、おそらくは近世以降に至り、第2次から第4次の整地が相次いで行われたのである（第II a～c層）。当該地西側の丘陵を削平するとともに、沢跡を埋めて整地し、平坦面を形成することによって、現在の宝泉寺境内が造成されたと思われる。第2次から第4次までの整地により、沢跡に相当する当該地の傾斜の解消を図ったのである。なお、第II a～c層中からは遺物の出土等が認められず、明確な時期等は不明であるが、宝泉寺の住職によると、本寺院は戦前に火災に見舞われたとのことである。しかし、今回の発掘調査では火災の痕跡は認められなかったことから、火災後に木炭や焼土等を整理し、入念に除去した上で盛土等による整地を行い、現在の寺院を建立した可能性も考えられる。寺院の建立地から災害の痕跡を除去するという行為は、充分に想定可能と思われる。そのため、第II a～c層の形成時期は比較的近年であり、第II c層が薄い堆積である要因も、火災痕の除去による削平と考えられるのではないか。

3 検出遺構

1) 第III層・第IV層(中世・近世)

第III層及び第IV層からは、ピットを主体とする15基の遺構群が検出されている(図版3)。同一層位中からは、中世～近世の遺物が出土しており、遺構群の年代も概ねその時期に比定することが可能であろう。しかし、遺構内からは遺物が出土せず、詳細な所属時期については不明である。

遺構はC4グリッドを中心に分布し、SD-4を北限に、SKp-39を南限とする比較的狭い範囲で検出された。遺構配置は北東～南西方向を指向しており、今回の調査区の西側に遺跡の主体が存在すると思われる。このような遺構の配置は、第IV層による造成範囲と深い関わりを有していると思われる。すなわち、現在の宝泉寺境内が沢跡を埋めて造成した範囲に相当し、遺構の配置もその平坦面の範囲内に一致していると考えられるのである。また、調査区の北半にはSD-4が認められ、この流路を北限とする南側に遺構が配置されたものと思われる。

溝 跡(図版3) 今回の調査区から検出された溝跡は、SD-4の1基である。第IIIb層上面で確認され、C4-4・5グリッドに位置する。規模は242×31cmで、調査区の西側へも延長する。深度は9cmで、底面標高は34.80m、主軸はN-87.5°-Eである。覆土は茶褐色を呈し、水量は概して少なかったと思われる。本遺構内から遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。この地点にはSD-51や第IIIb～d層が認められ、規模の変遷はあるものの、流路が継続的に存在している。本遺構はこのような流路の最終的な形態として認識し得るものであり、人為的な掘り込みによって少量の湧水の流路を規制したと考えられる。遺構確認面の上層には第IIIa層が盛土されるが、それ以降の段階では流路が確認されず、湧水等が途絶えたものと思われる。

ピット類(図版3) 第III層及び第IV層の上面において、14基のピット群が検出された。出土遺物の伴う遺構は皆無であり、詳細な所属時期は不明であるが、同一層位中から中世～近世の遺物が出土していることから、ピット群の年代も概ねその時期に比定可能と思われる。これらのピット群の大半は柱穴と思われるが、今回の調査範囲が比較的狭かったこともあり、建物跡等を復元することはできなかった。遺構の分布状況から、調査区の西側に遺跡の主体が存在すると考えられ、今回検出されたピット群は、それらの縁辺に相当するものと推測される。

これらのピット類の規模は、最大のもので直径42cmであるが、長軸が30cm前後のものが多く認められる(第1表・第5図)。平均では長軸31.1cm、短軸26.7cmの規模となり、比較的小規模な部類に属するものと思われる。また、長軸と短軸の比率が1:1～2:1に分布するものが大半で、円形もしくは梢円形の平面形態を呈するもので占められていた。遺構確認面からの深度は、最深のもので66cmであるが、深度11cmと浅いものもみられ、比較的個体差が著しい(第3図)。平均深度は28.4cmである。しかし、底面標高は海拔34.8m前後に集中し、概ね一定的な深さとなっている(第4図)。なお、底面標高の平均は海拔34.76mである。

SKp-12は第IIIb層上面から検出され、C4-14グリッドに位置する。長軸32cm×短軸32cmで、円形を呈する。確認面からの深度は33cm、底面標高34.47mで、覆土は3層に分層される。第1層は暗茶褐色土で、直径1～2mm程度の木炭を微量に含む。第2層は黄灰色土で、第3層は暗灰色土である。

SKp-16は第IIIb層上面で確認され、規模は長軸36cm×短軸32cm、確認面からの深度37cm、底面標

高34.55mである。円形を呈し、C 4-20グリッドに位置する。覆土は4層に分層される。第1層は黄褐色土で、直径3~5mm程度の木炭を微量に含む。第2層は暗茶褐色土で、直径3~5mm程度の木炭を微量に含む。第3層は暗褐色土で、直径3~5mm程度の木炭を微量に含み、第4層は暗灰色土である。

S K p-17はC 4-20グリッドに位置し、第III b層上面において検出された。S K p-16の南側に隣接しているが、新旧関係は不明である。長軸28cm×短軸28cmの規模で、円形を呈する。遺構確認面からの深度は30cmで、底面標高は34.61mである。覆土は3層に分層され、柱痕も確認された。第1層は暗褐色土、第2層は黄灰色土で、ともに柱の根固め土に相当する。第3層は暗茶褐色土で、柱痕部に相当する。柱痕の直径は約12cmで、直径5mm程度の木炭を少量含む。

S K p-19は第III b層上面で確認され、C 4-19グリッドに位置する。長軸29cm×短軸26cmの規模で、確認面からの深度は20cm、底面標高34.75mである。形態は円形を呈する。覆土は3層に分層され、第1層は暗褐色土である。第2層は灰褐色土、第3層は青灰色土で、粘性・しまりとともに強い。

S K p-20は第III b層上面において検出された。C 4-19グリッドに位置し、S K p-19の北側に隣接している。規模は長軸32cm×短軸31cmで、形態は円形を呈する。遺構確認面からの深度は17cmで、底面の標高は34.80mである。遺構覆土は3層に分層される。第1層は暗褐色土で、直径5mm程度の小礫を数点含む、粘性・しまりとともに弱い。第2層は暗灰褐色土である。

S K p-21はC 4-24グリッドに位置し、第III b層上面で確認された。規模は長軸25cm×短軸23cmで、確認面からの深度は11cm、底面標高34.86mである。形態は円形を呈し、覆土は2層に分層される。第1層は暗褐色土で、直径1~3mm程度の木炭を微量に含む。第2層は明灰色土で、第IV層が少量混合する。

S K p-25は第IV a層上面で検出され、C 4-24グリッドに位置する(図版3)。S K p-26に接し、切り合ひ関係からS K p-26よりも古いことが確認された。規模は長軸42cm×短軸36cmで、確認面からの深度は34cm、底面標高34.82mである。形態は梢円形を呈する。覆土は4層に分層され、柱痕も認められる。層位番号はS K p-26からの連番とし、第3層は暗褐色土で、直径2~3mm程度の木炭を微量に含む。第4層は暗褐色土で、柱痕部に相当する。柱痕の直径は約10cmで、直径1~5mm程度の木炭を少量含む。また、灰白色粘質土や暗黄色粘質土を少量混合する。第5 a層は暗黄色土で、柱の根固め土に相当する。暗褐色土と灰白色粘質土、暗黄色粘質土の混合土で、直径1~3mm程度の木炭を微量に含む。第5 b層は暗黄色土で、第5 a層を基調とするが、暗褐色土の混合割合が多いため、やや暗色を呈する。

S K p-26は第IV a層上面で確認され、C 4-24グリッドに位置する(図版3)。切り合ひ関係から、S K p-25よりも新しいことが確認された。長軸25cm×短軸18cmの規模で、形態は梢円形を呈する。遺構確認面からの深度は16cmで、底面標高は34.98mである。遺構覆土は2層に分層され、層位番号はS K p-25との連番である。第1層は暗褐色土で、直径1~2mm程度の木炭を微量に含む。第2層は暗褐色土で、灰白色粘質土を少量混合し、直径1~3mm程度の木炭を微量に含む。

S K p-27は第IV a層上面において検出され、C 4-24グリッドに位置する(図版3)。S K p-25の南西側、S K p-28の西側に隣接しているが、新旧関係は不明である。規模は長軸36cm×短軸35cmで、円形を呈する。確認面からの深度は48cmで、底面標高は34.71mである。覆土は僅ねレンズ状の堆積状況を呈し、3層に分層される。第1層は暗褐色土で、直径1~3mm程度の木炭を微量に含む。第2層は暗灰色土で、暗褐色土と灰白色粘質土、暗黄色粘質土の混合土である。直径1~3mm程度の木炭を微量に含む。第3層は暗黄色土で、暗褐色土と灰白色粘質土、暗黄色粘質土の混合土である。第2層に比べて、暗黄色粘質土の混合割合が多く、直径1~3mm程度の木炭を微量に含む。

S K p -28は第IV a層上面から検出され、C 4-24グリッドに位置する。S K p -27の東側に隣接している。規模は長軸29cm×短軸29cmで、円形を呈する。確認面からの深度は32cmで、底面標高は34.84mである。遺構覆土は2層に分層され、第1層は暗褐色土である。直径3~5mm程度の木炭を少量含む。第2層は褐色土で、直径5~10mm程度の灰白色粘質土粒を少量、直径3~5mm程度の木炭を微量含む。

S K p -29は第III a層上面から掘り込みが確認され、D 4-3グリッドに位置する（図版3）。調査区西壁に接し、今回の調査区内では遺構の半分程度が検出された。本遺構の発掘は半截のみとし、完掘を行うことはできなかった。推定規模は長軸41cm×短軸40cm、形態は円形を呈すると推定される。掘り込み面からの深度は66cmで、底面標高は34.72mである。覆土は5層に分層され、柱痕も確認された。第1層は暗褐色土で、柱の根固め土に相当し、直径1~3mm程度の暗黄色粘質土粒を少量、直径1~5mm程度の木炭を微量に含む。第2層は褐色土で、柱の根固め土に相当し、直径1~20mm程度の暗黄色粘質土粒を少量、直径1~10mm程度の木炭を少量含む。第3層は暗褐色土で、柱の根固め土に相当する。直径1~5mm程度の暗黄色粘質土粒を微量、直径1~3mm程度の木炭を微量に含む。第4層は暗褐色土で、柱痕部に相当する。柱痕の直径は約10cmである。直径30~50mm程度の礫を数点包含し、直径1~3mm程度の暗黄色粘質土粒を微量、直径1~2mm程度の木炭を微量に含む。第5層は暗褐色土で、柱痕部に相当する。直径20mm程度の礫を数点包含し、直径1~5mm程度の暗黄色粘質土粒を少量、直径1~5mm程度の木炭を少量含む。

S K p -38は第IV a層上面から検出され、D 4-14グリッドに位置する。S K p -39の北東側に接するが、切り合い関係は不明である。規模は長軸29cm×短軸25cmで、梢円形を呈する。確認面からの深度は21cm、底面標高は34.88mである。覆土は3層に分層され、第1層は褐色土で、直径1~5mm程度の灰白色粘質土粒を多量に含む。第2層は褐色土で、直径1~2mm程度の灰白色粘質土粒を微量に含む。第3層は暗褐色土で、直径2~5mm程度の灰白色粘質土粒を少量、直径1~2mm程度の木炭を微量に含む。

S K p -39は第IV a層上面から検出された。D 4-14グリッドに位置し、S K p -38の南西側に接するが、切り合い関係は不明である。規模は長軸29cm×短軸28cmで、確認面からの深度は28cm、底面標高は34.83mである。形態は円形を呈し、覆土は2層に分層される。第1層は褐色土で、直径1~5mm程度の灰白色粘質土粒を少量、直径1~3mm程度の木炭を微量に含む。第2層は褐色土で、直径5~10mm程度の灰白色粘質土粒を多量に、直径1~5mm程度の木炭を微量に含む。

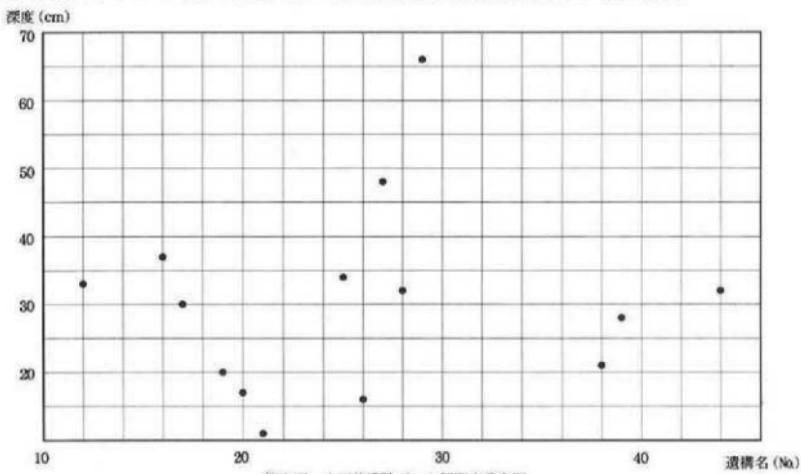
S K p -44は第IV a層上面からの掘り込みが確認され、D 4-8グリッドに位置している（図版3）。調査区の西壁に接しているため、今回の調査区内では遺構の半分程度が把握されたものである。推定規模は長軸22cm×短軸20cmで、形態は円形を呈すると推定される。掘り込み面からの深度は32cmで、底面標高は34.89mである。覆土は3層に分層される。第1層は暗褐色土で、直径1~5mm程度の暗黄色粘質土粒を少量含む。第2層は暗褐色土で、直径1~8mm程度の暗黄色粘質土粒を多量に含む。第3層は暗褐色土で、直径1~5mm程度の暗黄色粘質土粒を少量含む。

2) 第V層(古代)

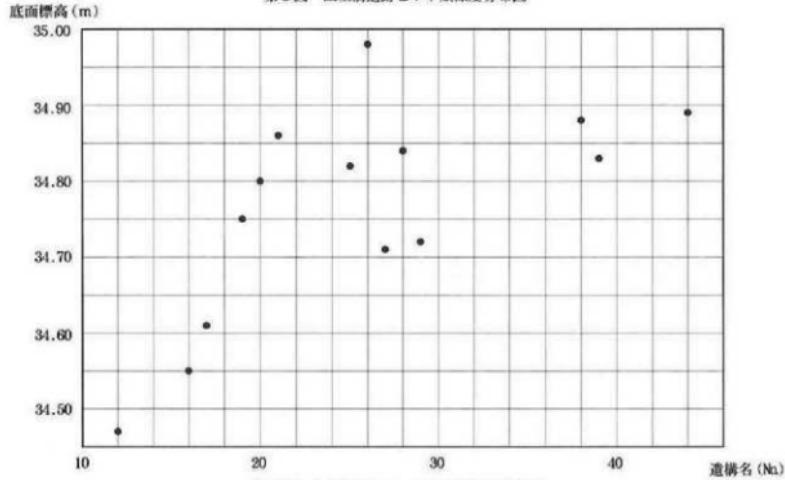
第V層は当該地を開析した沢内の堆積層で、古代の遺物包含層に相当する。遺物廃棄場的様相を呈し、本層を確認面として検出された落ち込みは、S D-51のみであった。

S D - 51(図版4・5) S D-51は、第V層上面において明確に検出された自然流路跡である。

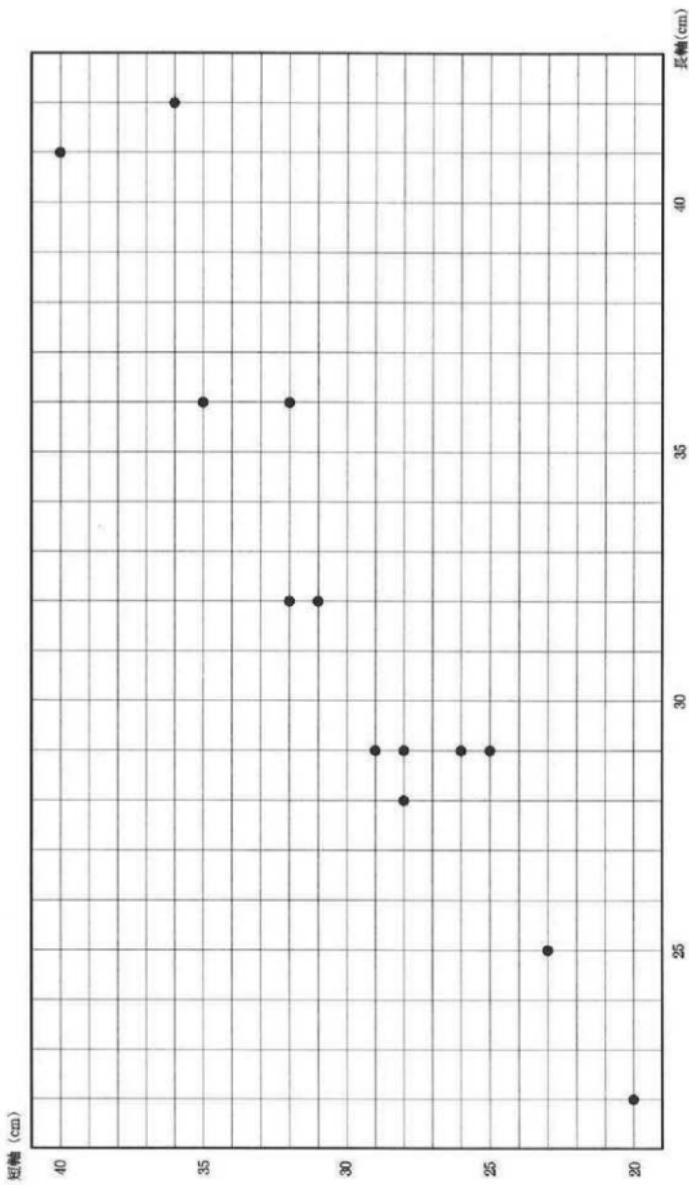
この流路跡は、当該地の盛土造成によって次第に幅を狭めていくことが把握され、最終的には第III b層上面から検出された S D-4 へと変遷し、第III a層の堆積過程において途絶えたものと考えられる。主軸は N-42° - Wである。長軸約642cm、短軸約291cm、深度は約51cm、底面標高33.67mである。西側丘陵地を開析しながら調査区北部を北西-南西方向に横切り、さらに東側に存在する現在の流路に合流するものと思われる。流路内部に堆積した黒色植物腐植粘質土（第V層）からは、木葉や堅果類および流木等の植物遺存体の他に古代の遺物がまとまって検出された。また、周辺からは主軸とほぼ一致する木杭列も検出されており、S D-51を埋めた後にさらに整地等の目的で設定されたものと考えられる。



第3図 山王前遺跡ピット類深度分布図



第4図 山王前遺跡ピット類底面標高分布図



第5図 山王削道跡記録削去量分布図

遺構名	種別	グリッド	形態	規模(cm) 長軸×短軸×深度	底面標高 (海拔m)	覆土	出土遺物	備考
1	擾乱	C 4						欠番
2	擾乱	C 4						欠番
3	擾乱	C 4						欠番
4	溝	C 4	溝状	242 × 31 × 9	34.80	茶褐色土	無	第III b層検出
5	擾乱	C 4						欠番
6	擾乱	C 4						欠番
7	擾乱	C 4						欠番
8	擾乱	C 4						欠番
9	擾乱	C 4						欠番
10	擾乱	C 4						欠番
11	擾乱	C 4						欠番
12	ピット	C 4	円形	32 × 32 × 33	34.47	暗茶褐色土・黃灰色土 暗灰色土	無	第III b層検出
13	擾乱	C 4						欠番
14	擾乱	C 4						欠番
15	擾乱	C 4						欠番
16	ピット	C 4	円形	36 × 32 × 37	34.55	黃褐色土・暗茶褐色土・ 暗褐色土・暗灰色土	無	第III b層検出
17	ピット	C 4	円形	28 × 28 × 30	34.61	暗褐色土・黃灰色土 暗茶褐色土	無	第III b層検出
18	擾乱	C 4						欠番
19	ピット	C 4	円形	29 × 26 × 20	34.75	暗褐色土・灰褐色土 青灰色土	無	第III b層検出
20	ピット	C 4	円形	32 × 31 × 17	34.80	暗褐色土・暗褐色土	無	第III b層検出
21	ピット	C 4	円形	25 × 23 × 11	34.86	暗褐色土・明灰色土	無	第III b層検出
22	擾乱	C 4						欠番
23	擾乱	C 4						欠番
24	擾乱	C 4						欠番
25	ピット	C 4	楕円形	42 × 36 × 34	34.82	暗褐色土・暗黃色土	無	第IV a層検出
26	ピット	C 4	楕円形	25 × 18 × 16	34.98	暗褐色土	無	第IV a層検出
27	ピット	C 4	円形	36 × 35 × 48	34.71	暗褐色土・暗灰色土 暗黃色土	無	第IV a層検出
28	ピット	C 4	円形	29 × 29 × 32	34.84	暗褐色土・褐色土	無	第IV a層検出
29	ピット	D 4	円形	41 × 40 × 66	34.72	暗褐色土・褐色土	無	第III a層検出
30	擾乱	C 4						欠番
31	擾乱	D 4						欠番
32	擾乱	D 4						欠番
33	擾乱	D 4						欠番
34	擾乱	D 4						欠番
35	擾乱	D 4						欠番
36	擾乱	D 4						欠番
37	擾乱	D 4						欠番
38	ピット	D 4	楕円形	29 × 25 × 21	34.88	褐色土・暗褐色土	無	第IV a層検出
39	ピット	D 4	円形	29 × 28 × 28	34.83	褐色土	無	第IV a層検出
40	擾乱	D 4						欠番
41	擾乱	D 4						欠番
42	擾乱	D 4						欠番
43	擾乱	D 4						欠番
44	ピット	D 4	円形	22 × 20 × 32	34.89	暗褐色土	無	第IV a層検出
51	走路跡	C 4 等	汎状	642 × 291 × 52	33.67	黑色植物質粘土質土	土師器 7点	第V層検出

第1表 山王前遺跡遺構計測表

IV 出土遺物

山王前遺跡の出土遺物は、土器類が大多数を占め、その他の遺物として自然流路の脇から検出された木杭や、流路内に堆積していた多量の自然遺物等が挙げられる。時代的には平安時代の出土遺物が主体を占め、中でも土師器が著しく突出している。その一方須恵器は、單一器種に限定され総数3点のみの出土にとどまる。近世の遺物としては、微量の唐津皿と呉須染付の施された陶磁器類が若干量出土している。中には近代にかかると思われる陶磁器も出土しているが、本報告では割愛した。本章では遺跡の主体的時期と考えられる古代を中心とし、次に出土遺物の多い中・近世とを区分して記述する。

1 古代の遺物

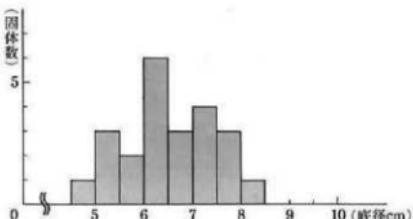
古代の遺物としては、土器類が主体となり、中でも土師器が圧倒的な数を占める。その一方で須恵器は器種が大変のみに限定され、出土量も破片3点にとどまる。灰釉陶器は、破片1点が出土している。これら土器類の時期については、土師器無台碗の形態と〔新潟県教委1994〕、越後では10世紀終末から須恵器が貯蔵具以外確認できなくなること等から〔春日1991・1992〕、ひとまず10世紀終末から11世紀初頭頃を想定しておきたい。その他の遺物として、小形の金属製品が1点出土している。また、遺物包含層とほぼ同時期と思われる自然流路底部の腐植土層から、堅果類を中心とした多量の自然遺物が出土している。自然遺物については分析を行っていないため、その概要を触れるのみにとどめたい。

1) 土器類

a 土器類概観

土師器 用途・機能上の種別としては、食膳具と煮炊具がある。食膳具は、無台碗で占められ、土師器全体の9割以上を占めている。また、無台碗には形態と大きさに多少のバラエティーが看取された。煮炊具は、長甕・小甕のみが少量確認できる。

無台碗は破片資料が相当量出土しているにもかかわらず、そのほとんどが接合不可能な小破片であり、完形品や復元可能な個体は極めて少量であった。そのため、全体の器形がうかがえる個体はわずか4点であり、法量における細別は事実上不可能と言わざる得ない。また、焼成や胎土は全体的に見ても差異が小さく、これらから細分することも非常に困難と判断された。しかしながら、土師器では無台碗に限り底部の残存率が高く、ある程度まとまった個体数の底径値分布を知ることができ、調査から得られた成果の一つと言える(第6図)。このデータからは、無台碗底径値が6~7cmにピークがみられることが確認された。資料全体を概観すると、無台碗の中には、底径値や器厚から判断して明らかに小形の製品と思われる



第6図 山王前遺跡土師器(無台碗)底径別個体数分布図

資料が数点含まれている。しかしながら、小形と思われる資料のなかで、全体の器形までうかがえる程度残存率の高い資料は皆無であり、実際に無台椀の器形の詳細なバラエティーを確認するには至らなかった。製作技法から見ると、皮形技法が確認可能な資料は全てロクロ成形されており、底部切り離し技法は全て回転系切り技法を用いている。

その他には、煮炊き具としての長甕・小甕が出土している。無台椀と比較すると両者とも、土師器全体の中での組成比率が非常に低く、小甕2点・長甕3点のみの出土である。残存率も低く、器形全体がうかがえる資料は皆無である。よって、それぞれの器形等のバラエティーを確認することは不可能だった。今回の調査は、調査面積が限られており、遺物量も決して多いと言えるものではなかった。しかしながら、本遺跡で出土した土師器については、前述のように組成比率に極端な偏りがみられることが、特筆すべき点として挙げられる。

須恵器 3点のみの出土であり、器種も貯蔵具である大甕1器種に限定される。土師器の出土量から比較して、組成比率が極端に低いと言える。なお、内2点は同一個体と思われる。

施釉陶器 灰釉陶器椀の口縁部破片が1点出土している。小破片資料であるため、正確な器形まではうかがえないが、口径とある程度の器形が想定できる資料である。

b 出土土器類等各説

土師器（図面図版6・7、写真図版26・27・29）

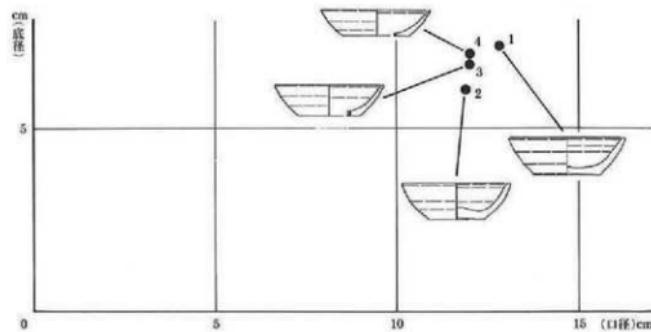
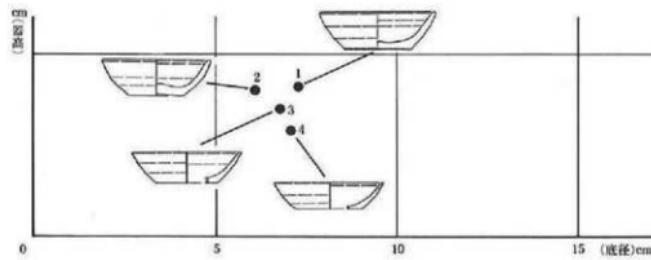
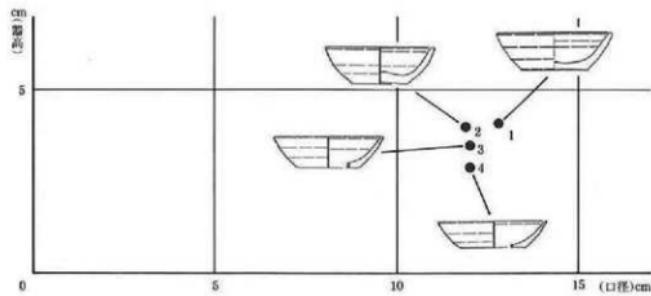
無台椀が主体となり、組成比率の9割以上を占める。その他の判断可能な器種は、小甕2点・長甕3点が出土しているのみである。

無台椀（1～28） 全体総数の大半を占めるが、細破片がほとんどであり、その大多数が接合不可能であることから、図示できた資料は僅かに28点である。器形全体が確認された個体は、その中でも4点のみで（1～4）、内2点は完形もしくは、ほぼ完形であった。底部の残存率が高く、底径が確認できる資料は23点存在するが、口径・器高が確認できる資料は極端に少ない。

1は、大形の無台椀で、ほぼ完形の資料である。本器種の中で最も大形の一つと思われ、器形は大きめの底部より緩やかに内湾しながら口縁部まで立ち上がる。底部内面周辺部にはロクロナデ調整以前に施された、カキ目状ハケ調整が確認できる。丁寧な成形・調整がなされるが全体がやや摩耗している。底部のみに二次焼成が見られる。2は、1よりも若干小ぶりな無台椀で、本遺跡で唯一の完形資料である。非常に丁寧な成形・調整がなされ、焼成も良好である。表裏面とともに強い横ナデが確認でき、底部には回転系切り痕が明瞭に残る。器形は1よりも内湾が激しく、底部が小さめである。内部に使用時のものと考えられる変色が目立つ。若干法量が異なるものの、両者は器形等に類似性が認められる。2点は、沢跡であるSD-51右岸、同一覆土層内から約5mの距離を隔てて出土している（図版4）。出土状態からも同時期性が強いと考えられる。なお、1は柏崎市・北田遺跡SD-90層下層出土の資料に、調整法が類似している〔品田1992〕。

3・4は口縁部から底部にかけての破片資料である。器形復元が可能であり、これにより1・2よりも器高が若干低く、器厚も薄手であることがわかる。体部が底部から口縁部まで緩やかに内湾し、口縁部が僅かに外反する形態をもつ資料である。両者とも内面に僅かなススが付着している。

5～27は底部を中心とした破片資料である。本遺跡では、無台椀に限り底部の残存率が高く、図示資料の大半を占めることとなった。底部資料のみでは、器形全体を復元できないが、本遺跡出土の無台椀底径



第7図 山王前遺跡土築器（無台輪）法量分布図

値の個体差を把握することができる貴重な資料といえる。この数値から、資料の中で1~4とは異なる21~27のような、底部が小形の一群として確認できる。

28は灯明に使用されたと思われる無台椀の破片資料である。口縁部の僅かな一部分のみを残す資料であるが、器厚等から判断して小形の椀と考えられる。口縁部の内側から、外側上半部にかけて煤・タールが明瞭に付着している。使用当時は広範囲に煤・タールが付着していたと考えられるが、器面と共に剥落し現在は一部分のみの付着状態である。食物織維状の付着物等は確認できない。

小甕（29~30） 現存部分が小破片に限られ、器形全体を推定することは不可能であるが、残存部分の形態から小甕と判断可能な2点を図示した。29・30ともに口縁部から頸部にかけての破片である。頸部が僅かに外反し、受口状の短い口縁部をもつものである。成形後の調整は明確には確認できない。断面が薄手で横方向の弯曲が激しく、より小形の形態が予想される。

長甕（31~33） 胴部破片が3点出土している。31は非常に厚手の胴部破片で、破片の上下は輪積痕で破損している。外側には逆「く」の字状に激しく隆起させた等間隔の隆帯が横位に廻っている。外面には激しい二次焼成痕を残す。32・33は胎土・色調・調整方法等から同一個体であると思われる。顯著なタタキにより胎土密度が高く、断面が非常に薄いものに仕上げられている。器面が著しく摩耗しているが、外側のタタキ痕は間隔の広い平行文、内側のアテ具痕は無文であることが確認できる。胎土には白色砂粒が多い量に含まれる。

須恵器・施釉陶器（図面図版7、写真図版28）

須恵器（34~36） 須恵器は大甕1器種のみ出土しており、計3点が出土している。34は大甕の頸部破片である。頸部が「く」の字状に大きく外反し、胴部全体が大きく肥大→内窪して底部に達する形態をもつものと思われる。残存部分が頸部の下半部分のみであり、本資料からは頸部の外反する度合いまでは確認できない。外面は格子目文のタタキ痕が部分的に認められ、内面は頸部以下に顯著な青海波文と平行文のアテ具痕が共存してみられる。切合い関係から判断して、青海波文→平行文の順で施されていることがわかる。胎土には白色砂粒の混入が目立つ。色調は表裏全体が黄灰白色である。35・36は同一個体と思われる胴部破片である。外面は平行文のタタキ痕、内面には青海波文と平行文のアテ具痕がやや顯著にみられる。切合いは、平行文→青海波文の順である。色調は外面の全面にススが付着して暗灰色を呈し、内面は灰白色である。焼成は良好で、胎土は非常に精良である。

施釉陶器（37） 灰釉陶器椀の破片が、1点のみ出土している。小破片資料であるが、口縁部を含む。口縁端部は、若干肥厚し丸みをもつ。有台の底部から緩やかに肥大→内窪して口縁部がやや外反する器形が予想される。器面全体が指ナデにより丁寧な調整が加えられている。器厚は3~4mmである。

2) 金属製品（図面図版7~39、写真図版28）

小形で板状の青銅製品が出土している。青銅製品は当該地周辺遺跡でも確認事例がなく、出土した製品の残存率も乏しいこと等から、慎重な検討が必要な遺物である。遺物の残存率が低いため、明確な言及はできないが、帶金具の欠損品の可能性が考えられる。時期の特定も不可能だが、古代の遺物包含層出土のため、古代の遺物に含めたい。遺物の表裏共に腐蝕が激しく、緑青が製品全体を包んでいる。径3mm以下の小孔が3カ所に穿たれている。

3) 自然遺物 (写真図版31-a)

多量のトチノミとクルミが自然流路内の堆積物として大量に出土している。大きさにはばらつきが目立ち、人為的な加工が加えられたものは確認できなかった。同様に多量の木材が堅果類の下部から検出されたが、木材の隙間にこれ埋めるように大量の堅果類が出土した。検出された木材は、人身大の大きさで樹皮や枝を残すものが多く、配列にも規則性がなかった。人為的な加工も見受けられず、流路内に自然堆積した遺物と判断された。木材の材質は針葉樹のスギと考えられる。これらは、流路の上流から流出した自然遺物であると思われる。出土した層には多量の砂や腐植物が伴い、木材が水害等で一度に流出し堆積した後、木材により流れが停滞した流路の底部に、堅果類等が自然堆積した状況を示していると考えられる。

2 中・近世の遺物

中・近世の遺物は古代と比較すると概して少ない。中世の遺物は攪乱部分から出土した、珠洲焼の擂鉢一点のみの出土である。近世の遺物はそのほとんどが包含層出土であるが、中には盛土や攪乱を受けた場所からも少量出土している。全点、陶磁器類の破片資料である。器種が特定できるものの中には、大半を占める食膳具と貯蔵具の他に、調理具としての擂鉢がみられる。

陶磁器類 (図面図版8、写真図版30)

中世の遺物は、珠洲焼の擂鉢破片1点出土であるが、その他は全て近世の陶磁器類である。その中で主体となるのは、肥前系と思われる陶磁器類であるが、数量的には10点を僅かに超える程度である。完形品は無く、大小の破片資料に限られる。その器形をみると食膳具が圧倒的に多い。本報告では、ある程度の器形がうかがえる良好な資料のみを掲載している。唐津皿1点が出土しており、両面無地で、主に内側全体と外側の上部に鉄釉が施釉されている。ほぼ完形で、陶磁器類の中でも最も残存率の高い資料である。

全体を概観すると、肥前系と思われる長須染付碗が陶磁器類全体の主体を占める。生産窯や詳細な時期の特定は困難であるが、技法や文様構成等から本稿では大まかに判断し、17世紀後半以降の肥前系陶磁器類としたい。陶磁器類の主体を占める染付碗には、丸碗と筒碗の2種類が存在するが、筒碗は1点のみの出土である。碗以外では徳利の頸部破片が1点出土している。染付の色調や焼成等から、全体の資料の大軒な時期差を感じられない。その他無釉の陶磁器類が数点出土しているが、良好に残存した資料は存在せず、本稿では省略した。

唐津皿(40) 1点のみの出土である。ほぼ完形の資料で、全体の器形や口径から小皿と判断される資料である。底部に回転糸切り痕がみられる。鉄釉が内面全体と外面の上部に掛けられている。胎土は酸化焼成がなされ、にぶい橙色を呈し、良質の土器に酷似する。

染付碗(41~44) 図化可能な個体のみを掲載した。外面に各種の草花文様、見込み部分に五弁花が多用される資料が多いことが、本遺跡出土磁器碗の特徴として挙げられる。41~44は中程度の大きさをもつ丸碗である。資料の全てが高台をもつ底部破片である。高台外側には全資料に共通して2本の線が廻り、高台内側には呉須染付による意匠不明の裏銘・文様が記されている。43は本遺跡で唯一出土した筒碗である。ほぼ3分の1が残存している。表裏ともに文様が施されており、外面には草花、内面では四方陣が描かれている。高台内側の銘は確認できない。

染付鶴利（45） 1点のみ出土している。頸部の小破片である。表面には2本の隆筋が廻っており、裏面は無釉でクロコ成形時の痕が著しい凹凸として残る。

瀬戸・美濃碗（46） 瀬戸・美濃焼の平碗が出土している。断面が平碗特有の直線的な立ち上がりを見せる。口唇部がやや歪んでおり、内面には焼成時に付着したと思われる重ね痕が確認できる。内面全体と裏面上半部に灰釉が掛けられている。胎土は十分に還元化されており、良好な焼成が行われている。

青磁（47～48） 47は高台付青磁碗である。ほぼ高台部のみ現存しており、底部が非常に厚手で、見込みが偏平である。透明釉が掛けられ、器面は緑灰色を呈する。見込み部に微細な削痕が確認できる。48は壺の頸部である。薄手で淡緑色釉が掛けられており、器面は淡青緑色を呈する。口唇部が内側に折り曲げ成形されており、内側に折り込まれた部分にも施釉されている。

擂鉢（49～51） 3点の出土である。49は珠洲焼の擂鉢破片であり、本遺跡唯一の中世遺物である。厚手の底部破片であり、全体の器形まではうかがえない。50は陶器擂鉢の胴部破片であり、口径・底径は確認できない。破片の器厚と弯曲状態により、胴部でも上半部に位置すると思われる。内外面に鉄釉が掛けられている。内面には非常に緻密で彫の深い印目が放射状に入る。全体が茶褐色を呈する。この他に、欠損した擂鉢を転用したと考えられる遺物が1点出土している。51は擂鉢の底部破片を利用し、砥石様の機能をもたらせた一種の転用品と考えられる。釉を施さない陶器擂鉢底部破片の一部に極度の摩耗痕が目立つ。擂鉢機能時の内面に残る摩耗痕よりもいっそう強い摩耗痕として確認できる。胎土が軟質かつ、微粒子なため砥石様の機能に適した素材であると思われる。

3 その他の遺物

時期の特定不可能な遺物を以下一括して記述した。遺跡の攪乱部分から出土した鐵滓1点と、SD-51の覆土内から出土した木杭の一群を掲載した。

鐵滓（38） 1点のみの出土である。出土層位が不明確であるため、時期の特定ができない鍛治関連遺物としてとらえておきたい。形状などの特徴から判断して、所謂椀形鍛治滓と考えられる。その特徴としては、断面形態がほぼ椀形を呈しており、底面には鍛治炉底の炉床土と砂利が部分的に付着している。同じく底面は鍛冶炉底の凹凸に入り込んで凝結した状態を留めている。一方、表面には黒色ガラス質の付着物が確認できる。

木杭（写真図版31-b） 自然流路であるSD-51側辺部の覆土内から、流路とは若干ずれた方向に規則的に配列された木杭群が検出されている。配列の方向が明らかに異なる、一辺10cm程度の角杭の配列と、直径5cm程度の丸杭の配列の2群が確認できた。両者ともSD-51を埋没・整地させた後に設定されたものと判断された。調査時に湧水が激しかったため、土層断面は詳細に観察できなかった。しかし、角杭の一群はほとんど腐食しておらず、現在使用されているものに近い定形的な角杭で、非常に近代的な様相をもっているよう看取される。丸杭の一群は、上部が人為的に切断されて激しく腐食している。おそらくは、平安時代以降の度重なる整地作業等に伴って破壊され、そのまま放置されたものと考えられる。後者の一群を写真図版（図版31）に掲載した。資料のほとんどに樹皮が確認でき、素材が大抵の枝もしくは細い幹であることを示している。素材周囲の細い枝は全て切り払われている。総じて末端は木杭特有の鋭利な先端部となっている。先端の加工は、上方からナタ等で数度の荒い断削り加工を行っている。このため先端部の断面形態は不整多角形を呈している。

〈古代〉

記載番号	出土地点	種別	器種 (部位)	法量(cm)	胎土	色調 (焼成)	備考
1	S D - 51	土師器	無台輪 (ほぼ完形)	口12.8 底7.3 高4.1	径1 mm白色砂粒	浅黄橙 (普通)	内面にハケ目調整あり 底部回転糸切り
2	S D - 51	土師器	無台輪 (完形)	口11.9 底6.1 高4.0	径1 mm白色砂粒	浅黄橙 (良好)	底部回転糸切り
3	D 4 - 10	土師器	無台輪 (体部)	口12.0 底6.8 高3.5	径1 mm白色砂粒 多い	浅黄橙 (普通)	内面スス付着
4	D 4 - 10 i	土師器	無台輪 (体部)	口12.0 底7.1 高2.9	精良	浅黄橙 (普通)	内面スス付着
5	S D - 51	土師器	無台輪 (口縁部)	口12.6	径1 mm白色砂粒	浅黄橙 (良好)	
6	S D - 51	土師器	無台輪 (口縁部)	口10.2	精良	浅黄橙 (良好)	
7	D 4 - 14 iv	土師器	無台輪 (底部)	口12.6	精良	浅黄橙 (普通)	
8	D 4 - 4 iii	土師器	無台輪 (底部)	口10.2	精良	浅黄橙 (普通)	
9	D 4 - 18 iv	土師器	無台輪 (底部)	底7.8	径1 mm白色砂粒	橙 (普通)	
10	D 4 - 10 i	土師器	無台輪 (底部)	底7.8	径1 mm白色砂粒	浅黄橙 (普通)	
11	D 4 - 9 ii	土師器	無台輪 (底部)	底7.1	径1 mm白色砂粒	浅黄橙 (普通)	
12	D 4 - 4 iii	土師器	無台輪 (底部)	底7.2	径1 mm白色砂粒	浅黄橙 (普通)	底部回転糸切り
13	C 4 - 25 iii	土師器	無台輪 (底部)	底6.6	径1 mm白色砂粒 雲母含む	浅黄橙 (普通)	底部回転糸切り
14	D 4 - 14 iii	土師器	無台輪 (底部)	底7.0	精良	にぶい橙 (普通)	底部回転糸切り
15	C 4 - 19 iii	土師器	無台輪 (底部)	底5.6	径1 mm白色砂粒 多い	にぶい橙 (普通)	底部回転糸切り
16	D 4 - 19 i	土師器	無台輪 (底部)	底8.0	精良	橙 (普通)	
17	D 4 - 4 i	土師器	無台輪 (底部)	底8.0	径3 mm白色砂粒	浅黄橙 (普通)	
18	D 4 - 4 i	土師器	無台輪 (底部)	底7.0	径1 mm白色砂粒 多い	橙 (普通)	
19	D 4 - 14 iii	土師器	無台輪 (底部)	底6.5	径1 mm白色砂粒	接合 出土位置図版4参照	
20	D 4 - 9 iv	土師器	無台輪 (底部)	底6.6	精良	浅黄橙 (普通)	
21	C 4 - 19 iii	土師器	無台輪 (底部)	底6.0	径3 mm白色砂粒 多い	橙 (普通)	
22	D 4 - 5 i	土師器	無台輪 (底部)	底5.7	径1 mm白色砂粒	橙 (普通)	
23	D 4 - 5 i	土師器	無台輪 (底部)	底5.7	径1 mm白色砂粒	浅黄橙 (普通)	
24	D 4 - 4 iii	土師器	無台輪 (底部)	底5.5	径1 mm白色砂粒	橙 (普通)	
25	D 4 - 5 ii	土師器	無台輪 (底部)	底5.2	径3 mm白色砂粒 径3 mm黒色砂粒	浅黄橙 (普通)	
26	D 4 - 4 ii	土師器	無台輪 (底部)	底5.1	径3 mm白色砂粒	浅黄橙 (普通)	接合 出土位置図版4参照
27	D 4 - 4 iv	土師器	無台輪 (底部)	底4.6	径1 mm白色砂粒	浅黄橙 (普通)	
28	D 4 - 18 iv	土師器	無台輪 (口縁部)		精良	内面に煤・タールが付着 (打明具転用品)	

第2表 山王前遺跡出土遺物観察表(1)

〈古代〉

記載番号	出土地点	種別	器種 (部位)	法量(cm)	胎土	色調 (焼成)	備考
29	D 4-18 iii	土師器	小甕 (口縁部)		精良	橙 (普通)	受口状口縁
30	D 4-5 i	土師器	小甕 (口縁部)		径2mm白色砂粒	橙 (不良)	受口状口縁
31	D 4-9	土師器	長甕 (胴部)		径1mm白色砂粒	にぶい橙 (普通)	外側に激しい二次燒成痕
32	D 4-14	土師器	長甕 (胴部)		径2mm白色砂粒	橙 (普通)	接合 出土位置図版4 参照
33	D 4-19 i	土師器	長甕 (胴部)		径2mm白色砂粒	橙 (普通)	タタキ痕: 平行文
34	D 4-4-5	土師器	長甕		径2mm白色砂粒	橙 (普通)	33と同一個体
34	D 4-14	須恵器	大甕 (頭部)		径1mm白色砂粒	灰白色 (普通)	タタキ痕: 平行文
34	D 4-4 iv	須恵器	大甕 (頭部)		径3mm白色砂粒・ 雲母含む	灰白色 (良好)	タタキ痕: 平行文
35	D 4-14 i	須恵器	大甕 (胴部)		径3mm白色砂粒・ 雲母含む	灰白色 (良好)	アテ具痕: 青海波文
36	D 4	須恵器	大甕 (胴部)		径3mm白色砂粒・ 雲母含む	灰白色 (良好)	アテ具痕: 青海波文→平行文
37	D 4-19 i	灰釉陶器	椀 (口縁部)	口14.0	精良	黄灰白色 (普通)	タタキ痕: 平行文
							アテ具痕: 青海波文→平行文
							器厚 3~4 mm
							透明釉

〈中・近世〉

記載番号	出土地点	種別	器種	部位 (残存率)	法量(cm)	施釉・色調・文様	備考
40	D-4	陶器	皿	(ほぼ完形)	口9.0 底3.9	鉄釉 にぶい赤褐色	唐津小皿 無台底部に回転糸切り痕残る
41	B-5	磁器	丸碗	底部	高2.3 底4.0	透明釉 胎須染付 外面草花	肥前系
42	C-4	磁器	丸碗	底部	底4.2	透明釉 胎須染付 外面草花	肥前系
43	D-5	磁器	丸碗	底部	底5.0	透明釉 胎須染付 外面草花	肥前系
44	D-5	磁器	筒碗	(1/3残存)	口8.0 底3.8	透明釉 胎須染付 外面草花	肥前系
45	D-5	磁器	神利	頭部	高6.4	透明釉 胎須染付 内面四方彌	肥前系
46	C-5	陶器	平碗	口縁部	口11.1	透明釉 胎須染付 反釉 黄緑灰色	煎戸・美濃
47	B-5	青磁	青磁碗	底部	底5.2	灰釉 緑灰色	
48	C-5	青磁	壺	頭部	口11.0	淡緑色釉 青緑色	厚く施釉される
49	B-5	珠洲	擂鉢	底部		内面黄灰色 外表面暗灰色	胎土 精良 焼成 普通
50	B-5	陶器	擂鉢	底部	口9.0	鉄釉 茶褐色 無釉	御目深くて緻密
51	C-4	陶器	擂鉢	底部		橙	外面に激しい擦痕あり 素焼き擂鉢の伝用品 長3.4cm 幅5.4cm 厚2.3cm

第3表 山王前遺跡出土遺物観察表(2)

V 総括

今回の実施した発掘調査は、今まで数少ない鶴石川中流域における調査ということもあり、当該地の歴史を知る上で非常に貴重なものといえる。文献や古文書などからは知ることのできない、当時の人々の土地利用や土地改良の様子等をうかがうことができた。本章では調査のまとめとして、調査の成果について簡単に振り返り、遺物および遺構をもとにして、遺跡について若干の検討を試みることとした。

1 調査の要約

山王前遺跡は、柏崎平野を形成する二大河川の一つ鶴石川中流域左岸の僅かな面積の沖積地に立地するものである。現在の宮平集落内の宅地部分に相当するため、その存在は近年まで知られていなかった。周知化された経緯は、平成8年度、県営農免農道整備事業に関連して行った試掘調査をその端緒とする。周囲の遺跡には、黒姫神社付近を中心とした区域に秋里遺跡や宮平の塚、宮平城跡が古くから周知のものとして知られている。

今回の調査結果としては、古代の遺物とはほぼ同時期に存在した自然流路跡（SD-51）、中世・近世の遺物と柱穴群が検出された。調査区域が狭小であるため、集落としての山王前遺跡の姿までは確認することはできなかった。しかしながら、出土した遺構・遺物等から遺跡の存在した時代や、遺跡の想定範囲などを検討することができた。

特筆すべき遺構としては、古代に存在した自然流路が挙げられる。流路内部からは10世紀終末から11世紀初頭に比定される土器、堅果類の種子や流木等の植物遺存体が検出された。また、流路に伴う沖積層が調査区全体にも広がることが確認された。以上のことから、この流路の存在により古代における調査区域とその周辺は沢地形にあり、集落が営めるような環境下にはなかった。そのため、集落縁辺に設けられた廐棄場として利用されていたと考えられる。そしてこの流路は、その後の集落の居住域拡大や土地改良等の開発行為に伴い盛土・整地されることとなる。しかし、整地後にもこの流路に伴う沖積層がみられ、中・近世の生活面では排水用と思われる小規模な溝状遺構（SD-4）として残存することから、跡地での流水・湧水等が既統的に続いたものと考えられる。

出土遺物は古代のものが多く、土師器と須恵器が主体を占めている。土師器は日常生活で使用される食膳具が主体となり、煮炊具も確認されている。土師器からみる器形的特徴等からは、さほど時期幅がみられない。須恵器の食膳具が出土していないことも考慮すると、10世紀終末から11世紀初頭に比定できるものと思われ、遺跡の帰属時期も概ね一致していると考えられる。また、灰釉陶器が1点検出されたことにも留意したい。中・近世の遺物は少なく、包含層より後世の整地層や攪乱部分からの検出が目立つことから、整地事業の際にある程度失われた可能性も考えられる。

2 遺跡の消長

遺跡の存在した時期は出土遺物から判断して古代（10～11世紀）、中世（13～14世紀）、近世（17世紀

以降)がそれぞれ想定される。帰属時期が断続的であり、遺跡の長期的継続性や連続性は確認できない。

古代 当該地は、承平年間(931~937)に成立した『和名類聚抄』からみると三鷹郡の高家郷に属していた可能性も挙げられるが、宮平の地名はもとより中嶋石地区の地名が直接文献にのぼることがなく、その詳細は不明である。現宮平地区における古代の遺跡としては、当遺跡の他に秋里遺跡が形成されており、その関係が課題となっている〔柏崎市教委1997〕。秋里遺跡は古代における主体時期はおおよそ9世紀頃が想定され、山王前遺跡とは時期的に大きなブランクが存在する。そして秋里遺跡は山王前遺跡が形成される時期に一時に廃絶され、その後時期を入れ替えるように営まれている。

中・近世 中世においては、宮平は佐橋荘に属するものと思われ〔村山1990〕、南条7ヶ条の一つに含まれるものと考えられている〔柏崎市教委1996〕。出土遺物からみると、13世紀~14世紀には山王前遺跡と秋里遺跡は、一時的に時期を重ねるように集落を営んでいたことが確認されるが、それ以降、後者では生活の痕跡が認められなくなる。このため、宮平では集落が山王前遺跡を含む現在の地点に集約し、集落と田畠が分化した形態になったと思われる。なお、伝承では水田經營の効率化のため集落を字山王前・字林ノ前に集めたといわれている〔柏崎市教委1997〕。また一般的に、越後の集落は16世紀頃に近世・近代へと継続する集落が成立したと考えられている〔坂井1996〕。さらに、現宮平集落は宮平城跡と推定される黒姫神社に対しほぼ直線状に形成されており、水田經營の効率化以外にも、集落の形成上何らかの信仰的制約が働いていた可能性も示唆されるものである。

一方、『白河風土記』における「寶泉寺」の項には、文安年間(1444~1449)に領主秋野玄蕃頭が菩提寺としたが、応仁の乱よりしばらく無住となり、元和年間(1615~1624)に善根村の淨廣寺の住職により再興されたと記載されている。それ以前は住持を持て定めていなかったという。試掘調査ならびに本調査で現境内で出土した、唐津焼・瀬戸天目等を始めとした陶磁器は、17世紀以降に比定されるもので、寺院にかかる遺物である可能性が高い。また、確認調査において近世終末頃の遺物と遺構も検出されている。のことから、宮平集落が中世にその存在を示し、それ以降宝泉寺とともに継続するものであると想定されよう。

3 集落における土地利用

最後に、自然流路跡SD-51を中心として、周辺地形と土地利用等に関する若干の考察を加えることとする。

調査区は古代において、自然流路による地形的制約を受け、居住空間からは距離を隔てた集落の周辺部に位置するものであった。そしてこの場では、沢状の落ち込みを利用して生活廃棄が積り返されていたものと考えられ、遺跡の中心部は現在の宝泉寺境内部分から北側に相当するものと思われる。また、この沢は自然流路として丘陵からの流れをもち、時折豪雨等の影響により洪水を引き起こしていたものと想定される。

中・近世では非常に散漫ではあるが、調査区西側に遺構群の一部が検出され、何らかの生活の痕跡が確認された。SD-51を埋め、周辺を整地した後、生活領域の一部として利用が開始されたことを明示するものである。集落の本体は、現在の宝泉寺本堂部分とそれ以北に存在するものと思われ、近世以降に整地を行い、現在の宝泉寺が建立されるに至ったと考えられる。また、宝泉寺は山号を「黒姫山」と称するが、現在も宮平集落に多くの檀家をもち、地元住民の信仰の根強さがうかがえる。なお、本寺は過去火災に見

舞われたとのことであるが、今回の調査からその痕跡は認められなかった。火災が小規模なもので、調査区付近までその影響が及ばなかったこと、3期に渡って認められる整地層に、火災の痕跡を残さない程の檀家衆による入念な整地事業が行われたこと等が推測される。

S D-51の延長が予想される調査区北西側は、周囲と比較して盛土による整地が著しい部分であるが、現在、宝泉寺の物置き小屋が存在するものの、宅地として積極的な利用はなされていない。また、この部分は過去水田として利用されていたとの宝泉寺住職の聞き取りも得られた。現在も集落外の沖積地では、字大沢から流れ出す流水を農業用水として水田経営が行われているが、前述部分はこの用水を引き込むには標高差が大きく、現況での水田経営が困難なことは自ずと予想される。一方、宝泉寺裏山には丘陵を開拓する沢地形が残されており、季節的水量差は予想されるものの、水田経営の一助となる自然流路が存在した可能性が高い。そして現在でも各家庭では丘陵から流れ出す湧水を引き込んで利用しており、その痕跡を今にとどめている。

以上のように、調査区周辺は古代においては S D-51を中心とした沢地形であったため、集落外であったが、中世以降、整地を行い集落として整備されたことが確認された。その後さらに大規模な盛土・整地が繰り返され現在の宝泉寺境内となった。中世以降繰り返し行われた整地は、当時では集団による大規模事業といったレベルのものであり、信仰の対象となるような背景がその根底に考えられる。

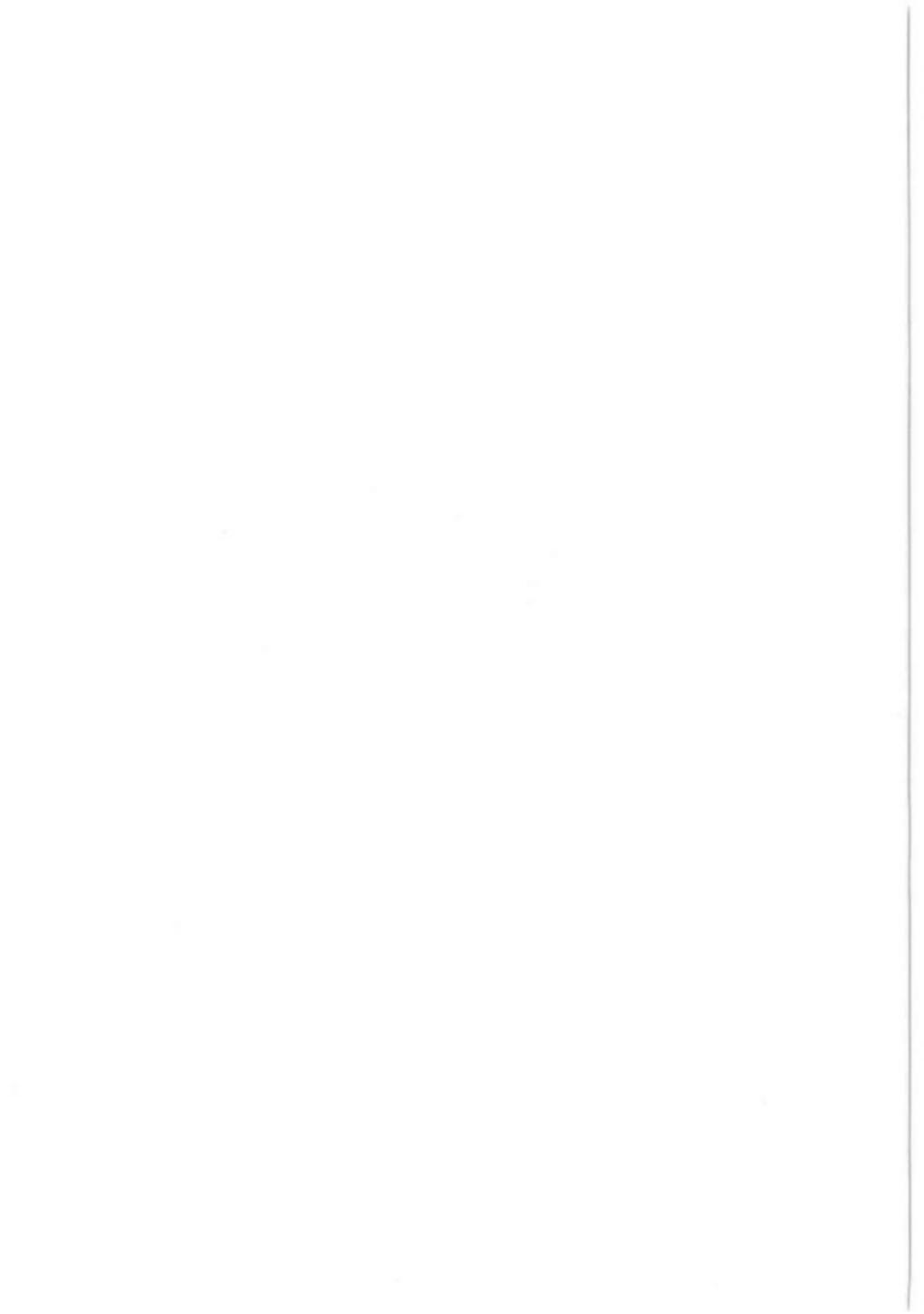
《引用・参考文献》

- 柏崎市郷土資料刊行会 1979『中越石村史』
柏崎市教育委員会 1996『柏崎市の遺跡Ⅳ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第22集）
柏崎市教育委員会 1997『柏崎市の遺跡Ⅴ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第27集）
柏崎市立図書館 1977 広瀬 典著『白河風土記・越後國刈羽郡之部』
春日真実 1991「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟県考古学談話会会報』第8号 新潟県考古学談話会
春日真実 1992「越後佐渡における須恵器生産終末期様相の」『北陸古代土器研究』第2号 北陸古代土器研究会
坂井秀弥 1996「遺跡が語る開拓と村の歴史古代・中世を中心として」『月刊文化財』第398号 文化財文化財保護監修（新潟県埋蔵文化財調査報告）
品田高志 1992「柏崎市・北田遺跡出土土器をめぐって—中世皮立筋における土器の一様相—」『新潟県考古学談話会会報』第9号 新潟県考古学談話会
新潟県教育委員会 1994『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書』一之口遺跡東地区（新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集）
村山教二 1990「中世における柏崎市域」『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん委員会編

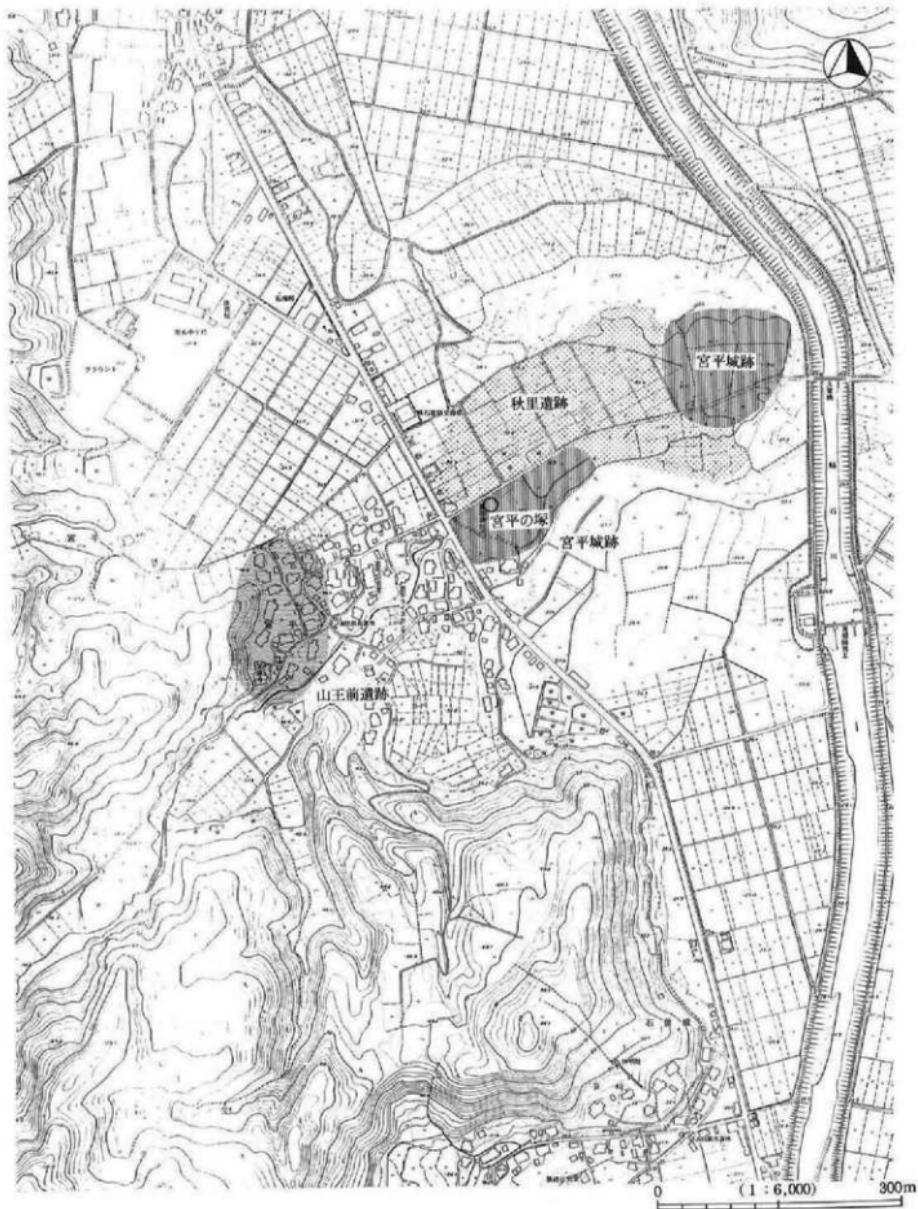
図 版

凡 例

1. ここには遺跡全体及び遺構に関わる実測図と写真をおさめ、図面図版と写真図版に区分されるが、図版番号は通し番号となっている。
2. 図面図版には、方位と縮尺を付した。方位はすべて真北である。
3. 写真図版に記した方位は、対象物に向かった方向をおおまかに示したものである。

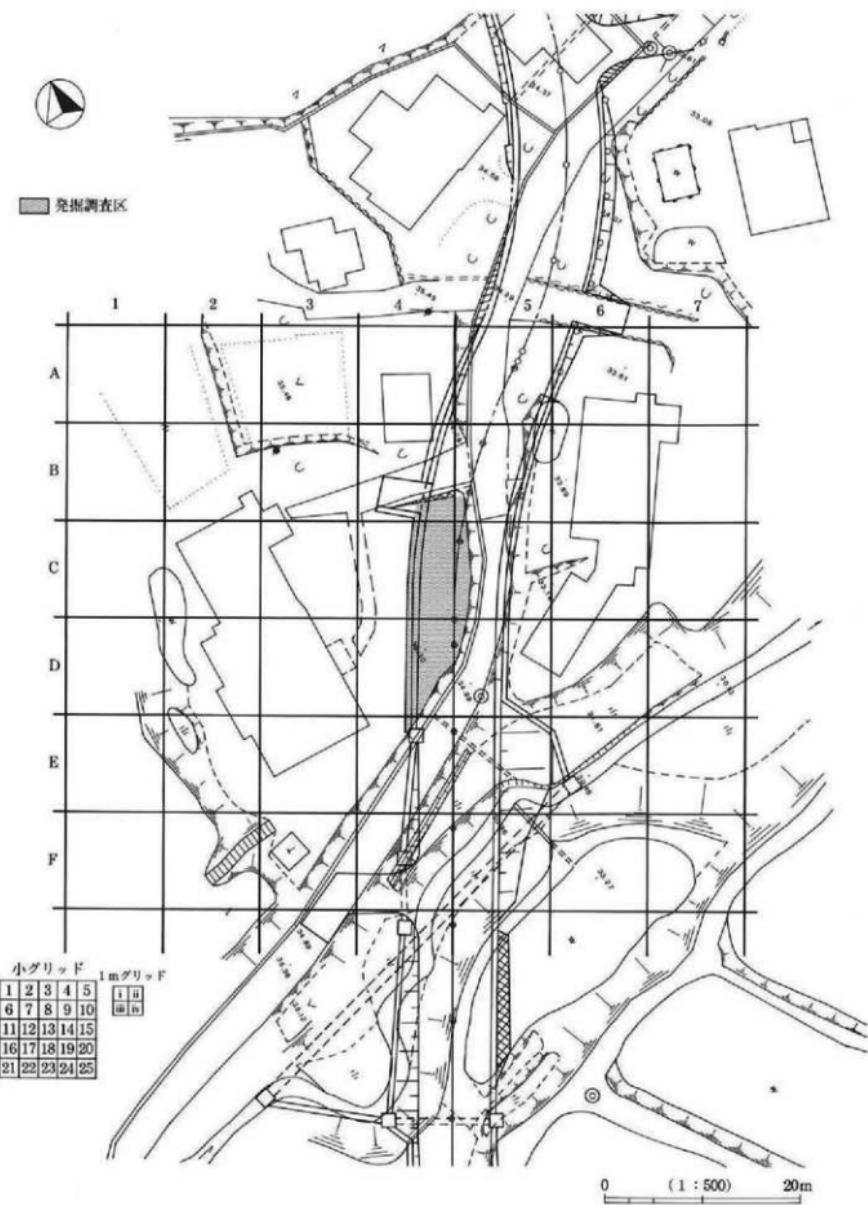


山王前遺跡と宮平遺跡群

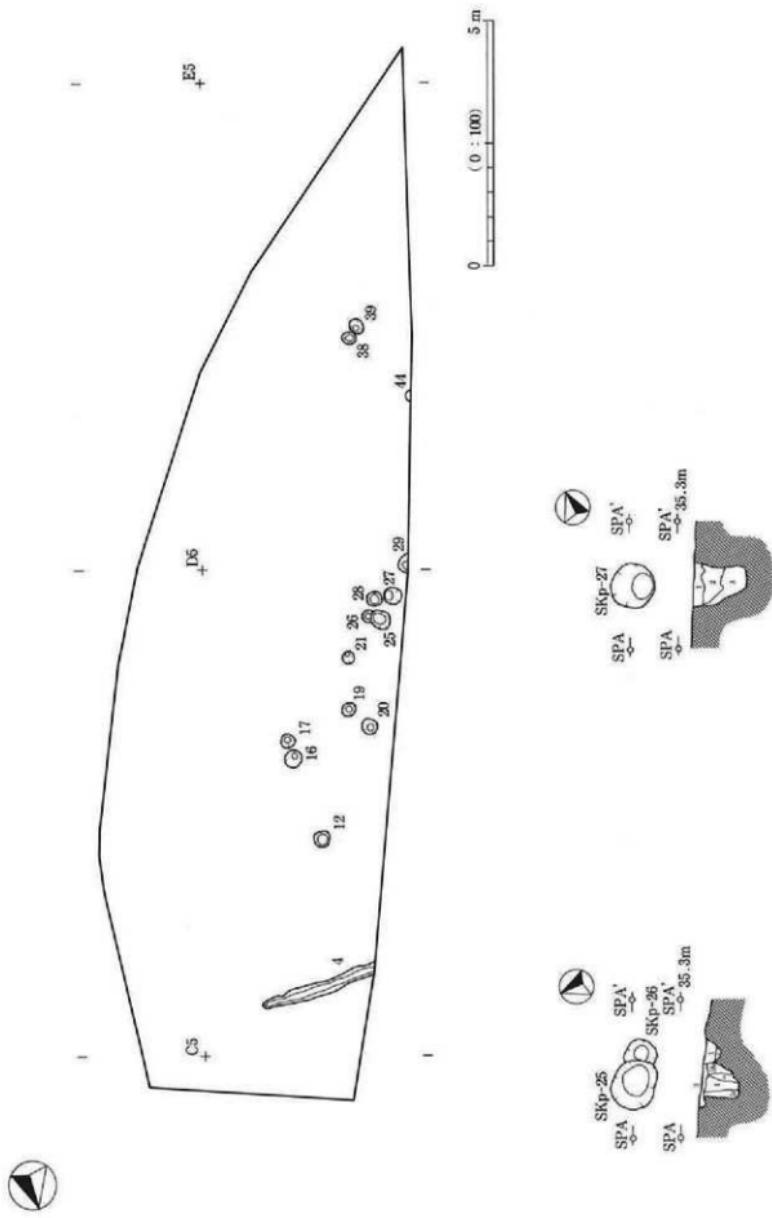


図版2

山王前遺跡発掘調査区とグリッドの配置



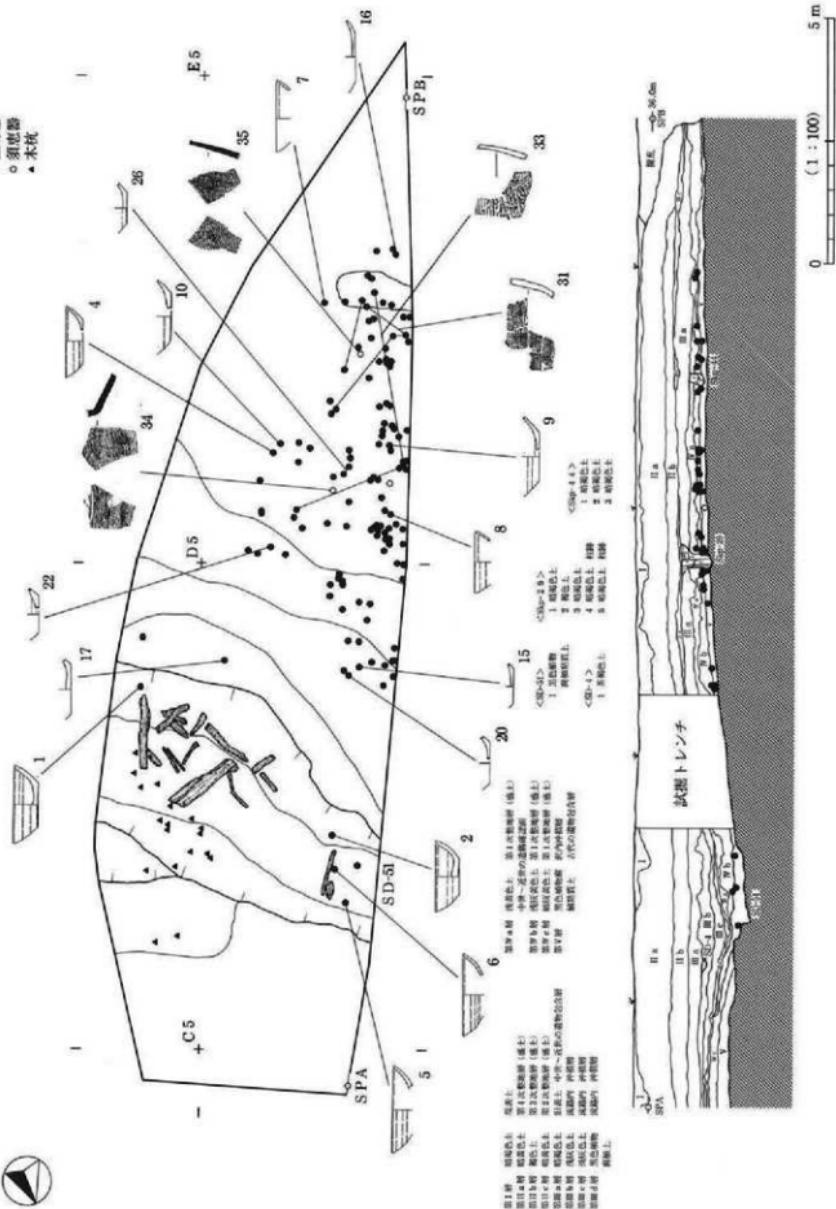
山王前遺跡遺構全体図（第III・IV層）



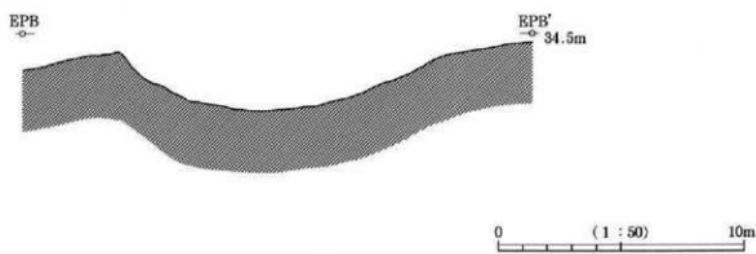
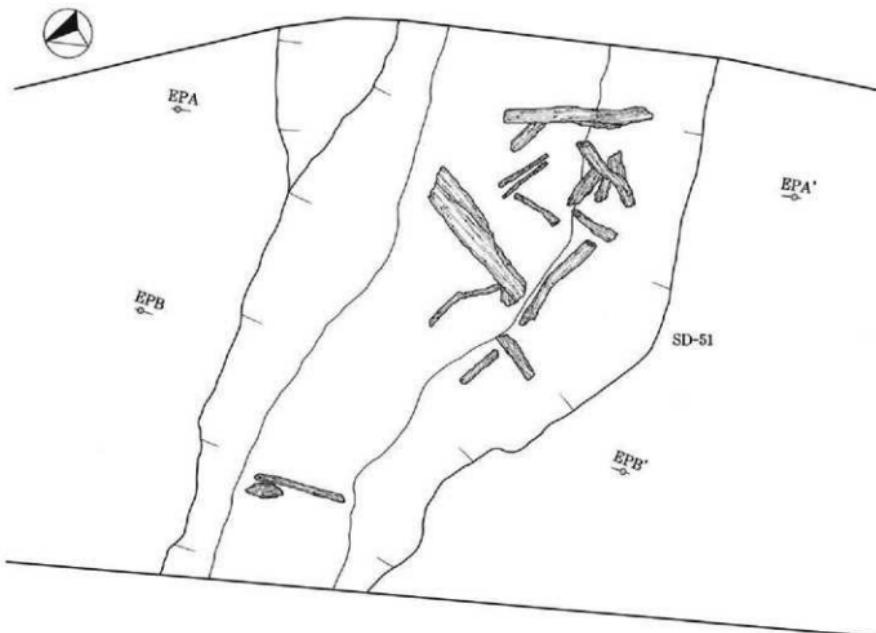
図版 4

山王前遺跡遺構全体図（第V層）

● 土師器
○ 頸部飾
▲ 木杭

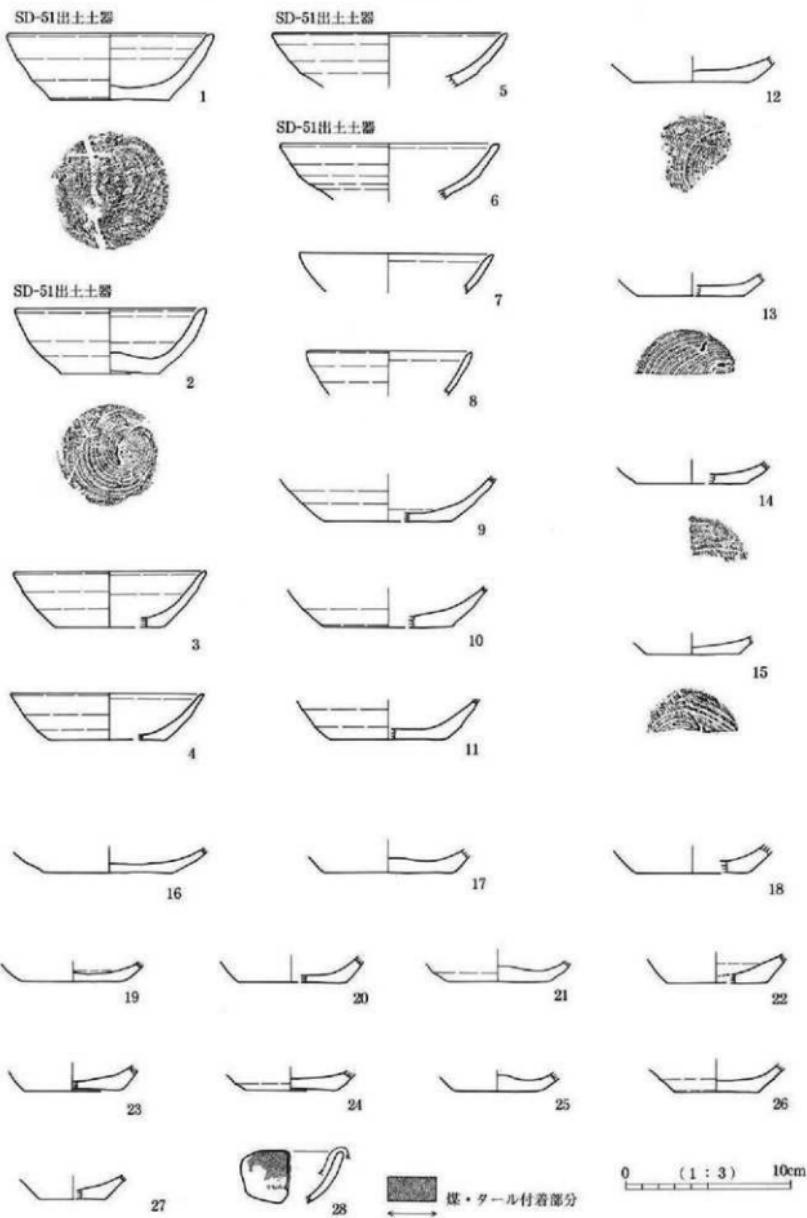


山王前遺跡遺構個別図 (SD-51)



図版 6

山王前遺跡出土遺物 1



山王前遺跡出土遺物 2



29



30



32



32



31



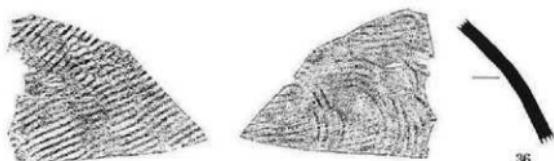
33



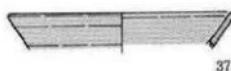
34



35



36

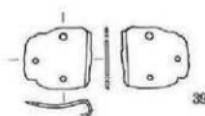


37

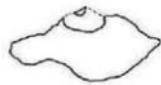
0 10cm
(1/3)



38



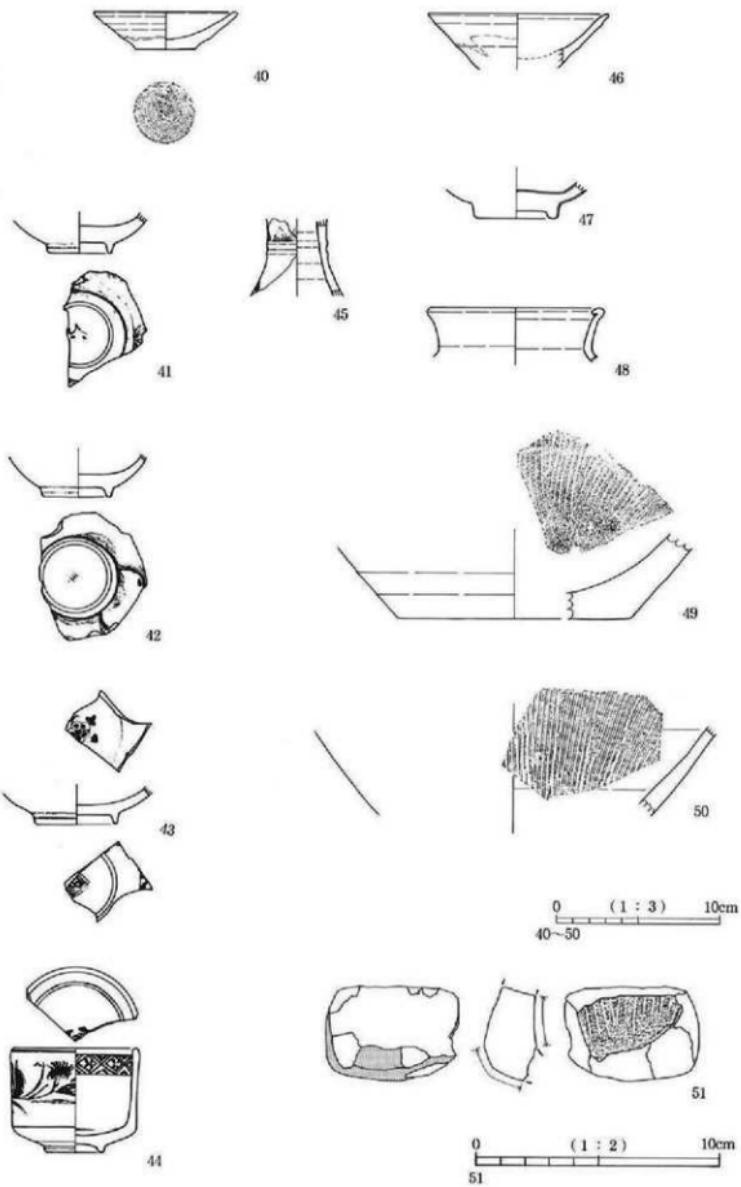
39



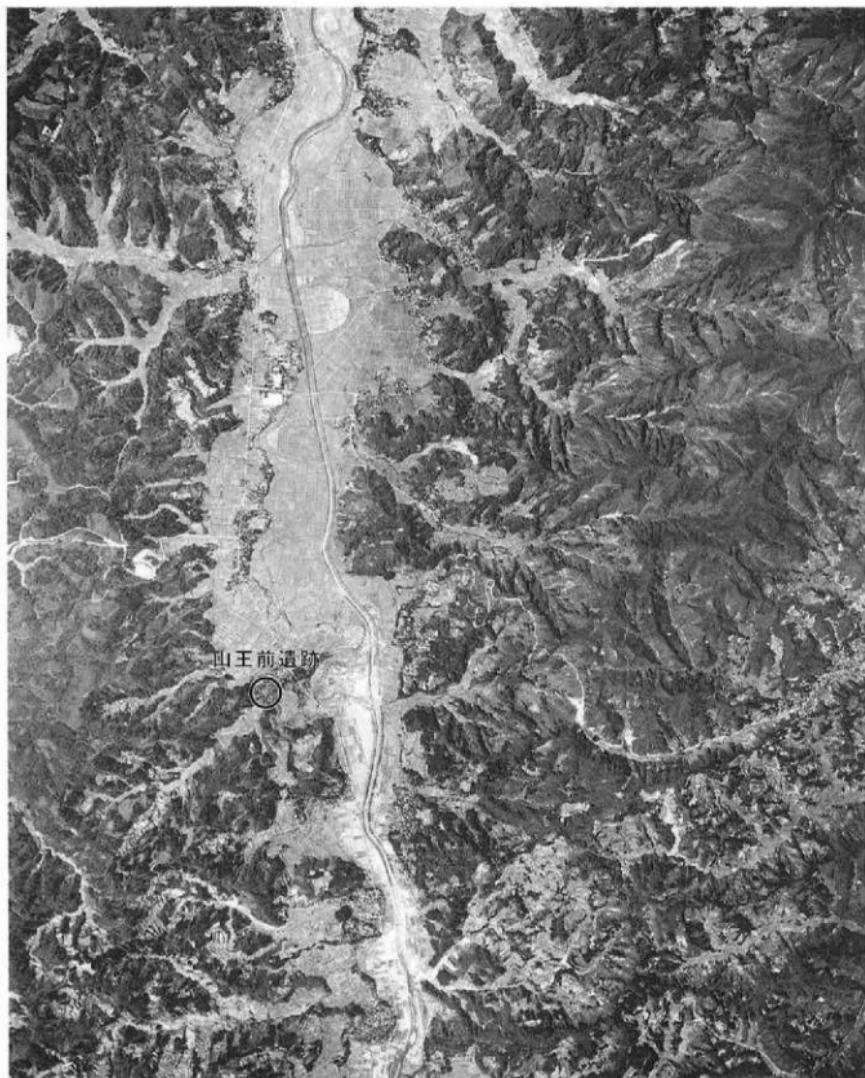
■ 炉床上
■ ガラス質付着物

0 (1 : 2) 10cm

山王前遺跡出土遺物 3



遺 跡 1



宮平地区周辺の航空写真（1961年撮影）

約1:30,000

遺 跡 2



a. 遺跡遠景

(石川峠から西方を望む)



b. 遺跡遠景

(石川峠から西方を望む)

発掘調査 1



発掘調査2



a.測量



b. SD-51溝上層の発掘



c. SD-51溝の発掘



d. 調査区水没状況



e. 発掘調査スタッフ

基本層序



a. 調査区東壁土層断面全景

(南から)



b. 調査区東壁(中央)

(東から)



c. 調査区東壁(南部)

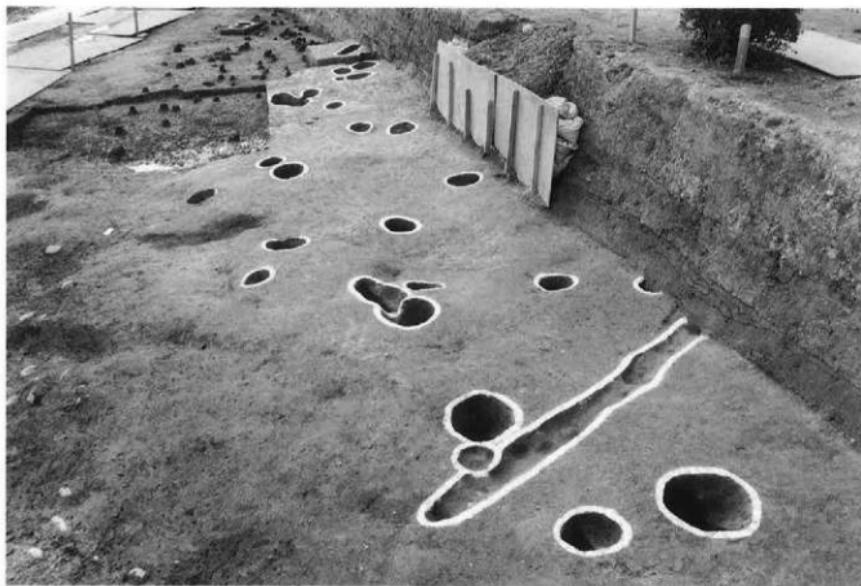
(東から)

第Ⅳ層の調査 1



a. 第Ⅳ層遺構群全景(1)

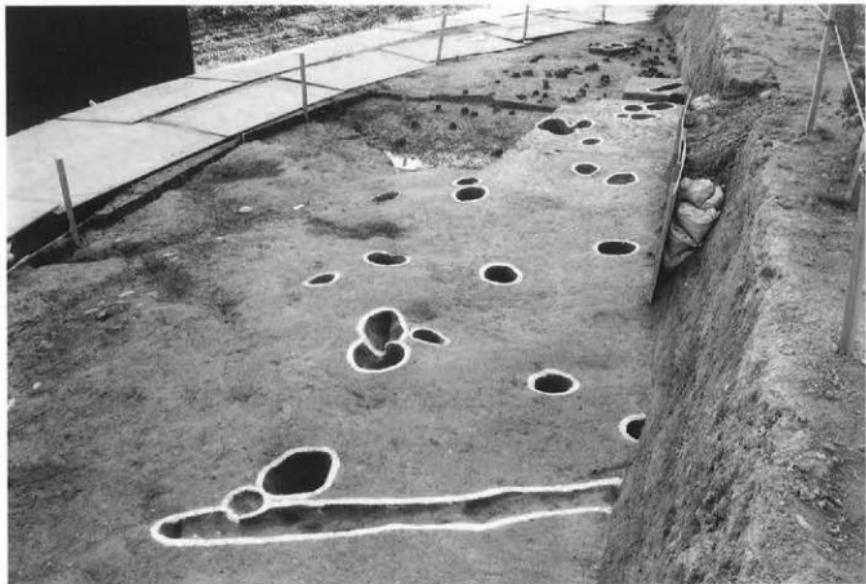
(東から)



b. 第Ⅳ層遺構群全景(2)

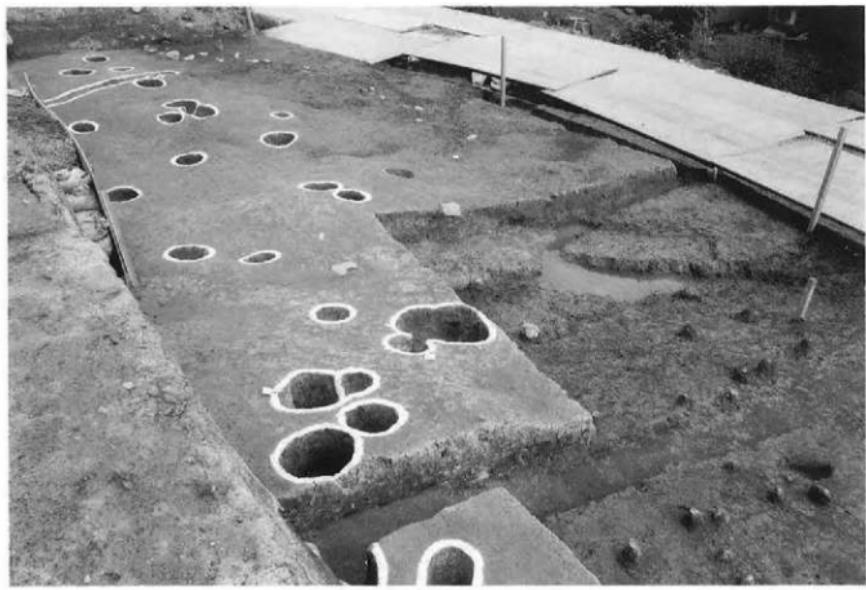
(北東から)

第Ⅳ層の調査2



a. 第Ⅳ層遺構群全景(3)

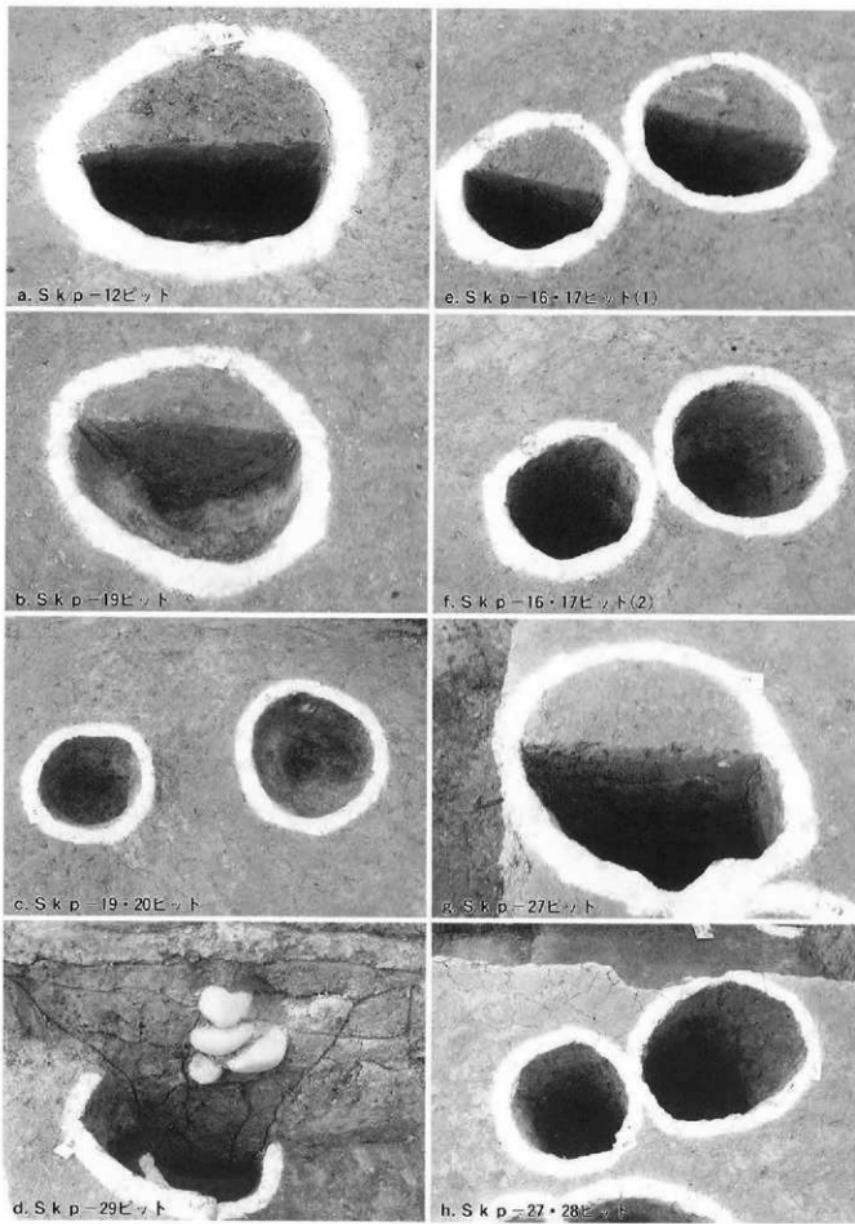
(北から)



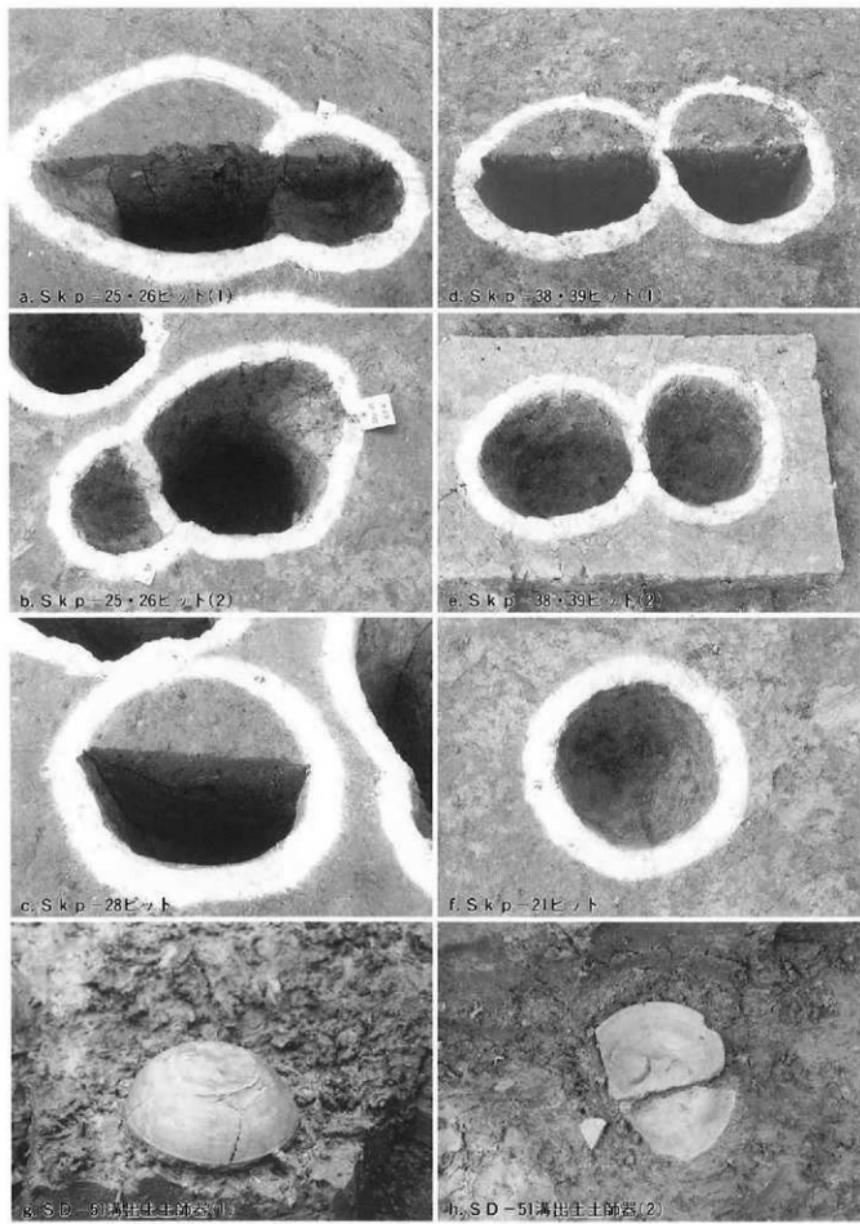
b. 第Ⅳ層遺構群全景(4)

(南西から)

第Ⅳ層の調査3



第IV層の調査4



第V層の調査1



a. 第V層完掘状況(1)

(南南西から)



b. 第V層完掘状況(2)

(南西から)

第V層の調査2



a. 第V層完掘状況(3)

(東から)



b. 第V層完掘状況(4)

(北北東から)

第V層の調査3



a. 第V層遺物出土状況(1)

(北東から)



b. 第V層遺物出土状況(2)

(東から)

第V層の調査 4



a. 第V層遺物出土状況(3)

(南西から)



b. 第V層遺物出土状況(4)

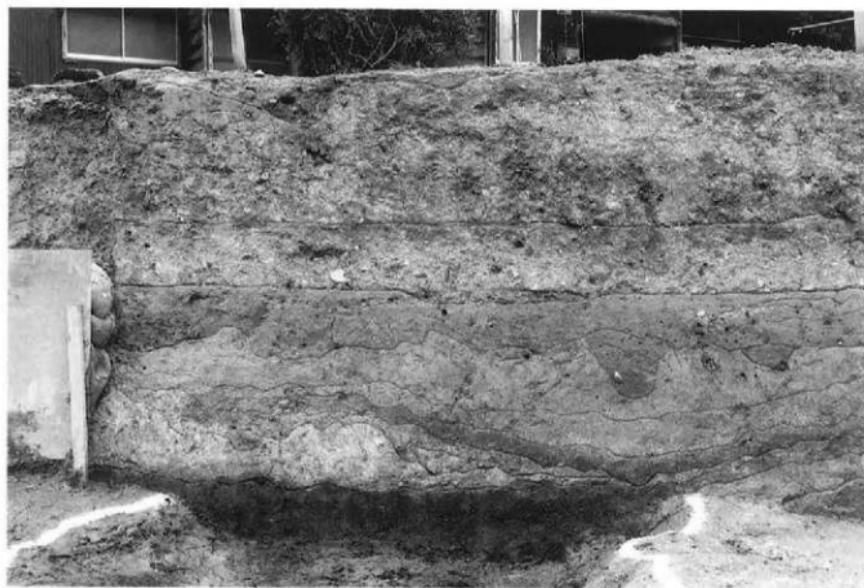
(南から)

第V層の調査5



a. S D - 51溝と基本層序

(北東から)



b. S D - 51溝層序と覆土

(南東から)

第V層の調査 6



a. S D - 51 溝 遺 物 出 土 状 況 (1)

(南東から)



b. S D - 51 溝 遺 物 出 土 状 況 (2)

(南東から)

第V層の調査7



a. SD-51溝遺物出土状況(3)

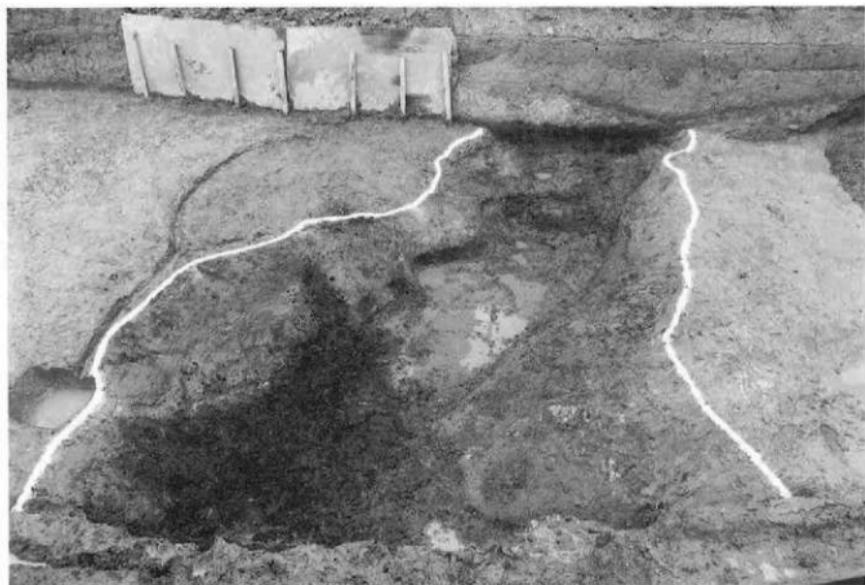
(北から)



b. SD-51溝遺物出土状況(4)

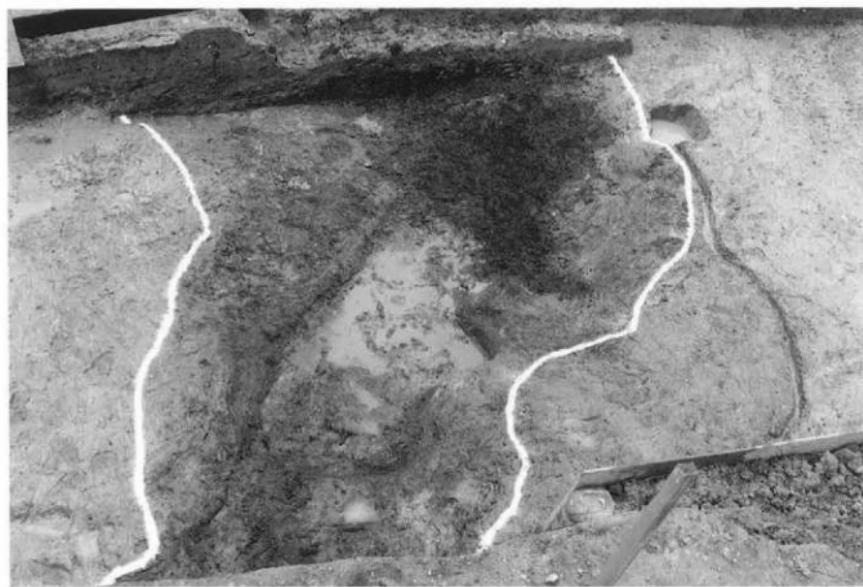
(南から)

第V層の調査 8



a. S D - 51 溝 完 堀 (1)

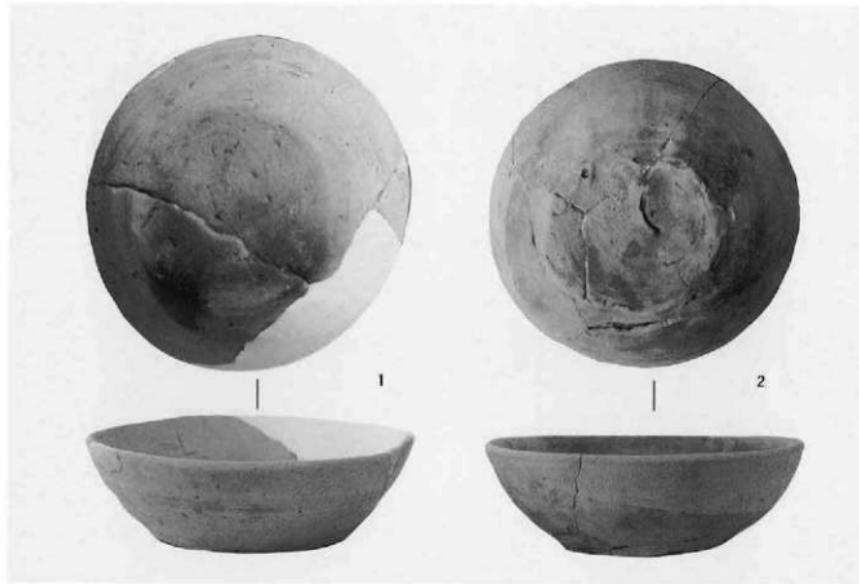
(南東から)



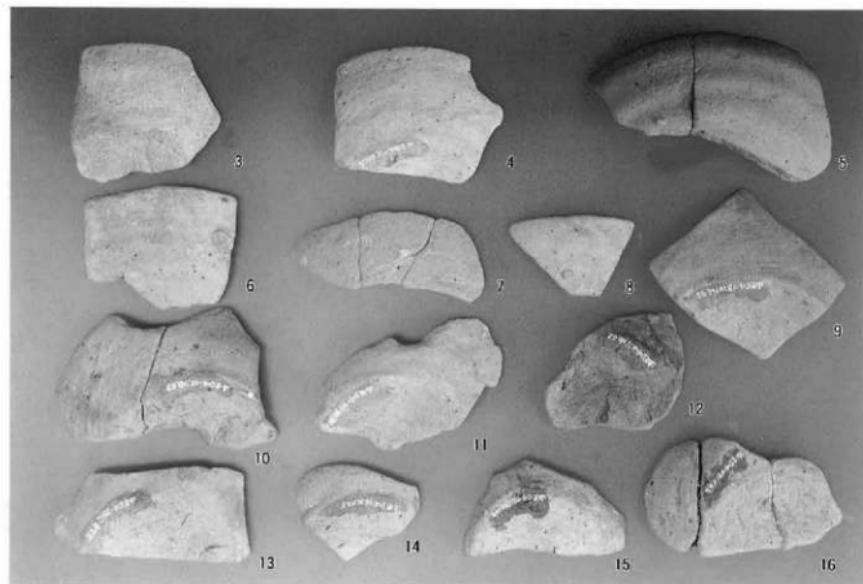
b. S D - 51 溝 完 堀 (2)

(北から)

出土遺物 1

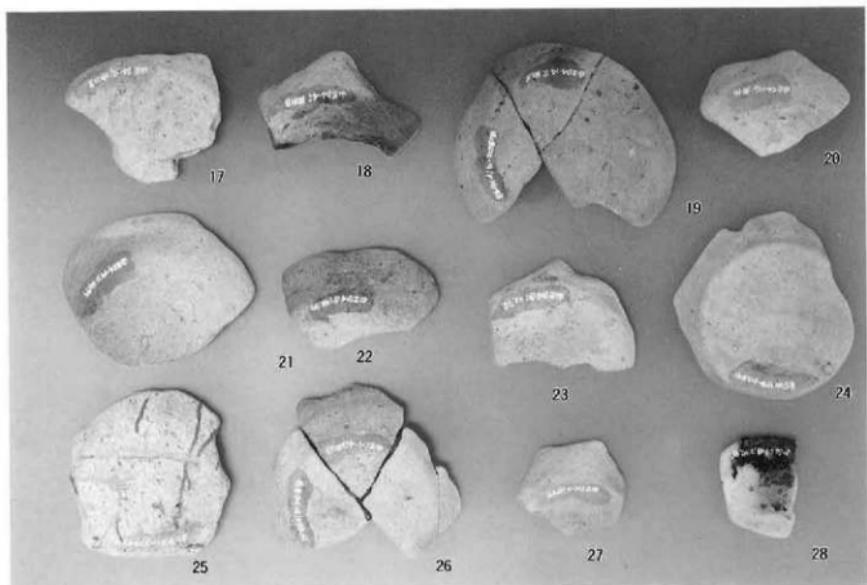


a. 古代の遺物(1)

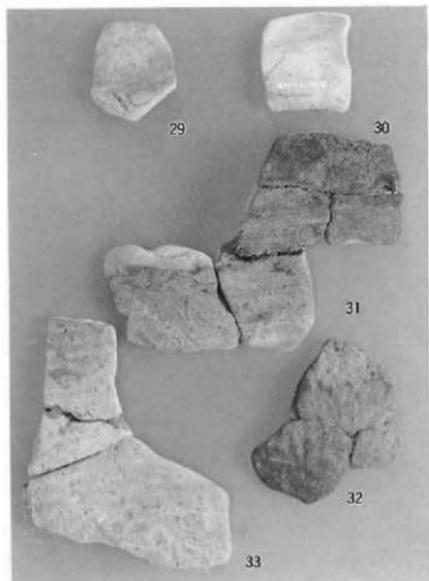


b. 古代の遺物(2)

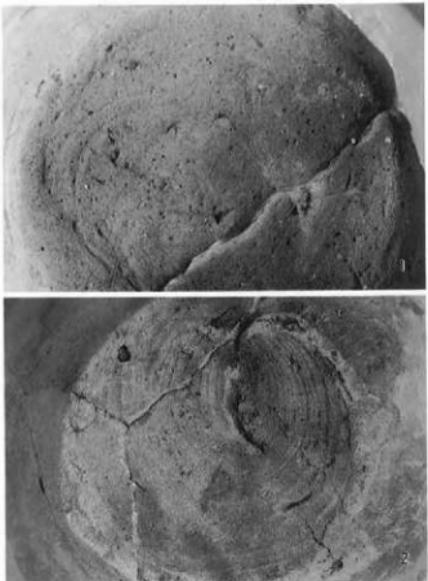
出土遺物 2



a. 古代の遺物(3)

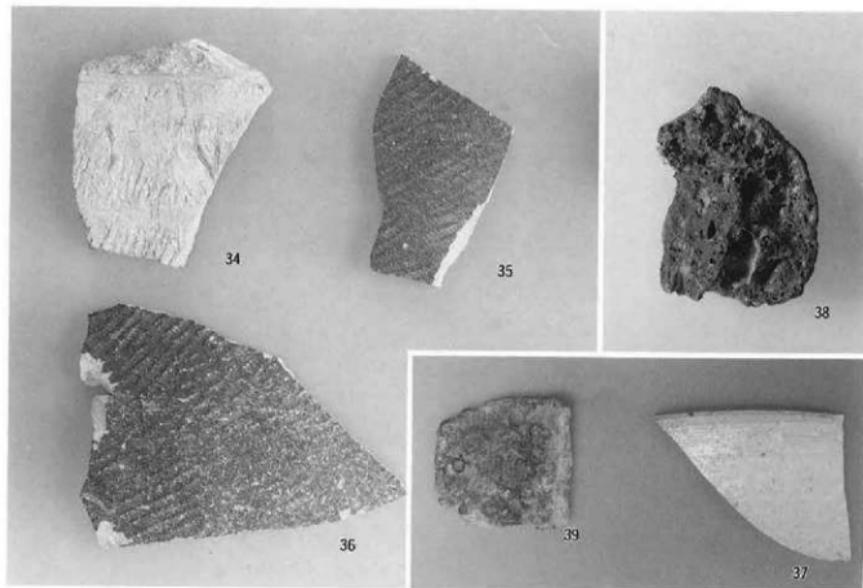


b. 古代の遺物(4)

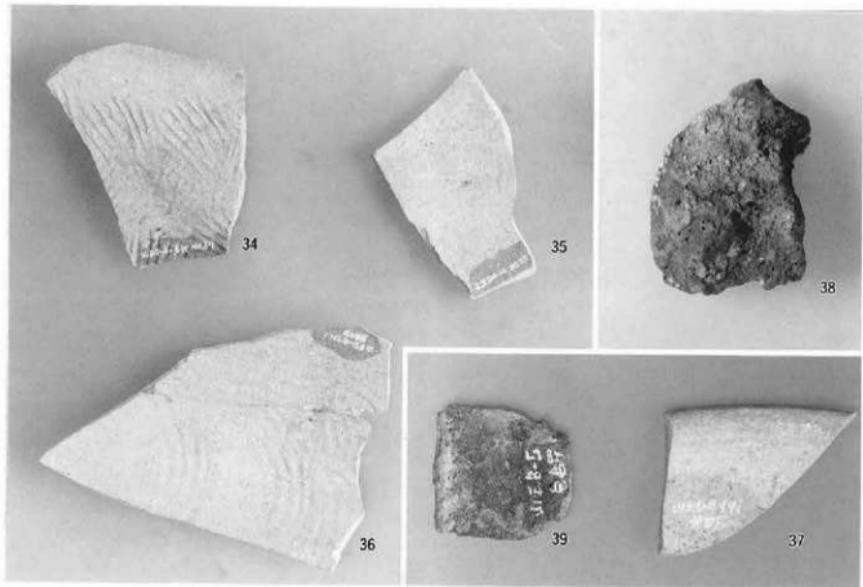


c. 土師器底面拡大写真

出土遺物 3

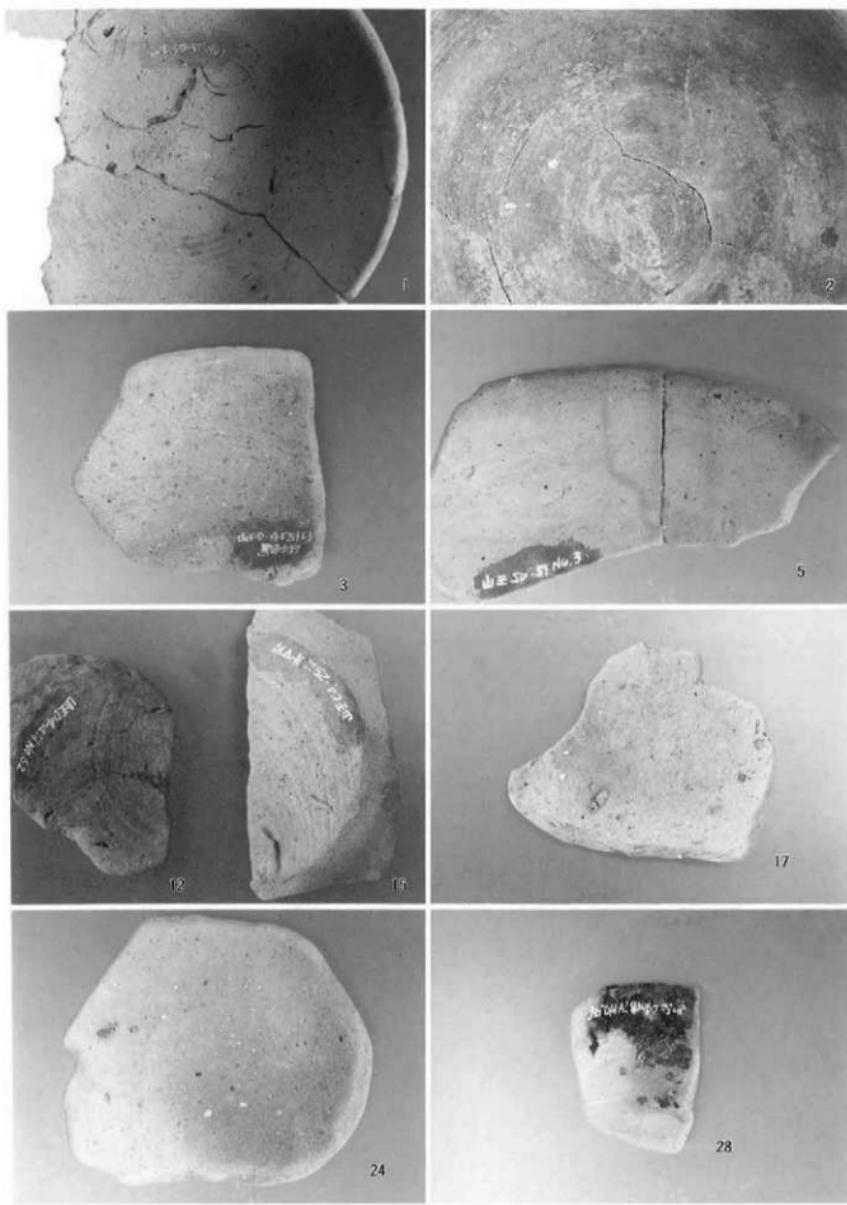


a. 古代の遺物(5)



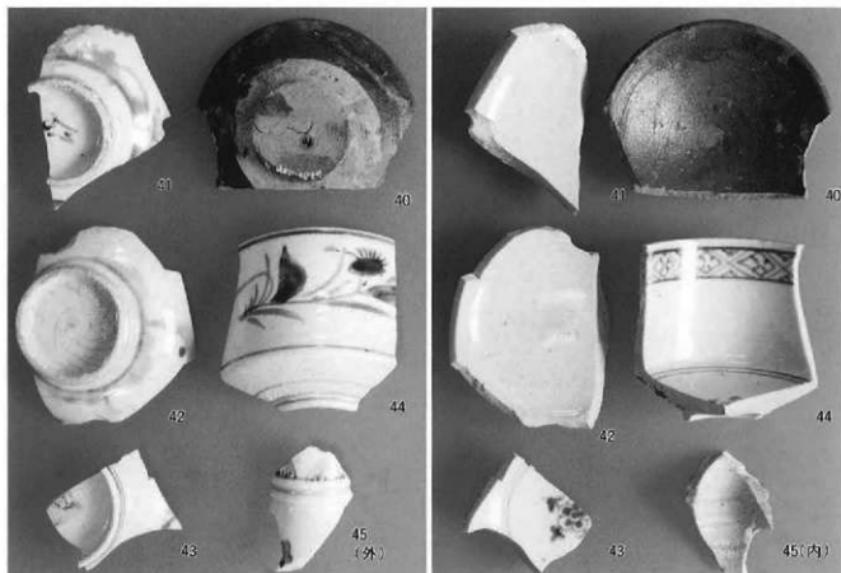
b. 古代の遺物(6)

出土遺物 4

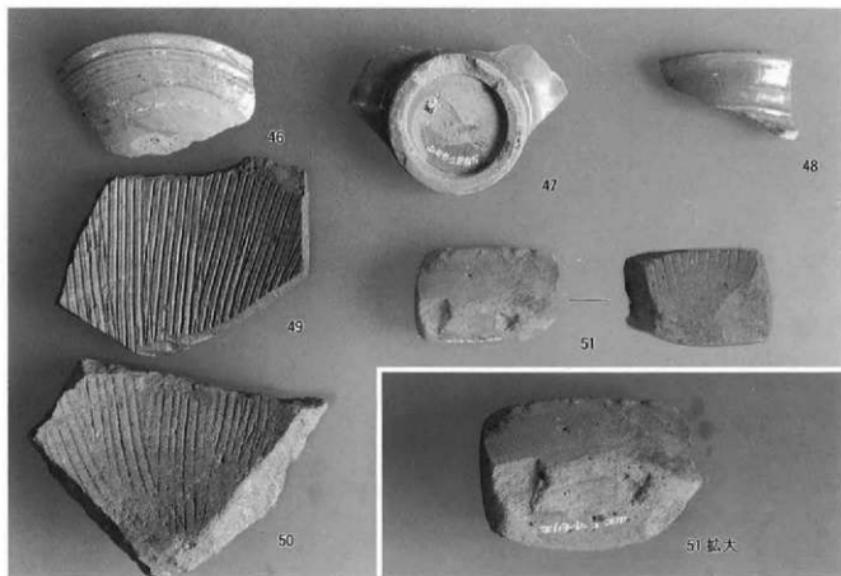


土師器 梵器面拡大写真

出土遺物 5

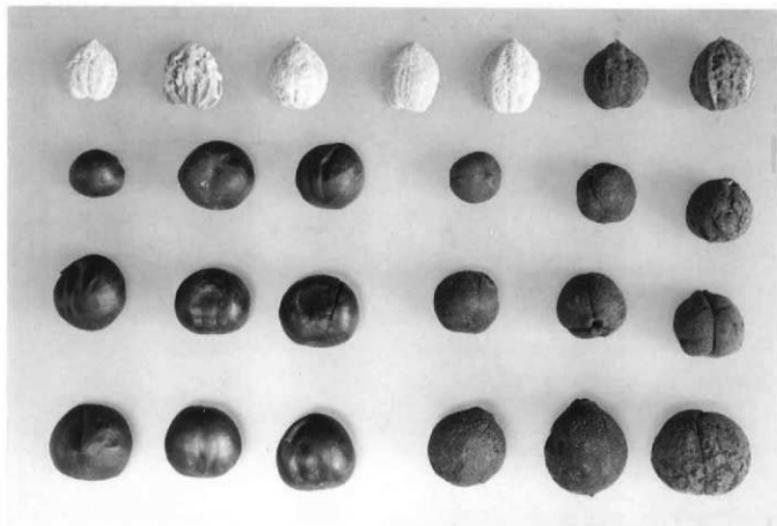


a. 中・近世の遺物(1)



b. 中・近世の遺物(2)

出土遗物 6



a. S D - 51 满出土植物遗存体



b. 木 杭

報告書抄録

ふりがな	さんのうまえ							
書名	山王前							
調書名	新潟県柏崎市・山王前遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	平吹 純・中野 純・品田高志							
編集機関	柏崎市教育委員会 文化振興課 遺跡調査室							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 TEL. 0257-21-2364							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ...	東經 ...	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
山王前遺跡	新潟県柏崎市 宮平	市町村 15205	遺跡番号 681	37度 17分 20秒	138度 37分 25秒	1997.10.07～ 1997.11.06	92.4	農免農道整備事業 に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山王前遺跡	集落跡	古代 中世 近世	ピット 溝	土師器・須恵器 珠洲焼 陶磁器				

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第28集

山 王 前

—新潟県柏崎市・山王前遺跡発掘調査報告書—

平成10年3月31日 印刷

平成10年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 株式会社 柏崎インサツ

